

天理市埋蔵文化財調査概報

(平成6年度・国庫補助事業)

長寺遺跡 (第13次)

長寺遺跡 (第14次)

柳本遺跡群竹ノ尻地点 (第2次)

1995

天理市教育委員会

例 言

1. 本書は、天理市教育委員会が平成6年度国庫補助事業として実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。本概報には、長寺遺跡（第13次）、長寺遺跡（第14次）、柳本遺跡群竹ノ尻地点（第2次）のそれぞれの調査概要を収録している。
2. 調査は、天理市教育委員会社会教育課が実施し、技術吏員松本洋明・青木勘時がそれぞれの現地調査を担当した。
3. 本書収録の調査地および調査期間の次のとおりである。

長寺遺跡（第13次）	天理市樫本町1504番地	平成6年5月9日～5月11日
長寺遺跡（第14次）	天理市樫本町2053番地	平成6年7月4日～8月23日
柳本遺跡群竹ノ尻地点（第2次）	天理市柳本町739番地	平成6年6月6日～6月23日
4. 現地調査から遺物整理、本書作成にいたるまで下記の方々の御助力を得た。記して謝意を表する（敬称略・順不同）。

大嶋和則・和田和哉・市村慎太郎（奈良大学学生）、木下満代・田坂佳子・田中涼子・清岡廣子（天理大学学生）、西山陽子（堺女子短期大学卒業生）、中森軍之助、中森富美代、西岡松枝
5. 現地調査および出土遺物について、下記の方々から有益な御教示、御指導を賜った。記して厚くお礼申し上げる次第である（敬称略・順不同）。

近江昌司・置田雅昭・山本忠尚（天理大学教授）、桑原久男（天理大学講師）、金原正明（天理大学付属天理参考館）、谷若倫郎（愛媛県埋蔵文化財調査センター）、伊藤恵理子（奈良大学卒業生）、小池香津江（奈良県立橿原考古学研究所）
6. 本概報の執筆は、それぞれの調査担当者および調査参加者が分担し、文末にその文責を明記した。なお、編集は青木勘時がおこなった。

目 次

長寺遺跡の調査

I 第13次調査

1. はじめに 2
2. 調査の結果 3

II 第14次調査

1. はじめに 3
 2. 調査の概要 6
 - (1) 層序 6
 - (2) 検出遺構 6
 - (3) 出土遺物 11
 3. まとめ 26
- 付載— 長寺遺跡第14次調査における花粉分析（金原正明・金原正子・中村亮仁）… 28

柳本遺跡群竹ノ尻地点の調査

- I. はじめに 31
- II. 調査の結果 31

長寺遺跡の調査

I 第13次調査

1. はじめに

長寺遺跡の第4・8次調査では、長寺1号墳（一辺30mの方墳）を検出した。残念ながら墳丘はすでになく発掘調査で周濠のみを検出したものであるが、幅8m、深さ1.5mの周濠から庄内期に併行する土器類が出土し、古墳時代初頭にあたる古いタイプの古墳であることがわかった。調査地点は東大寺山古墳群を形成する丘陵地帯から500mほど西方にある微高地上に位置し、丘陵地帯から延びる尾根筋状地形の先端に立地した古墳である。長寺遺跡では弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての包含層や遺構が見つかっており

古墳時代初め頃の集落が存在するものと推測され、長寺1号墳の築造に関わっているものと推測する。

ところで長寺1号墳は、周濠に曲がりをもつため墳形が方墳と考えられるが、一方では前方後円墳にともなう前方部の指摘もあり、墳形プランは興味深いものがある。前方後円墳であった場合、南向

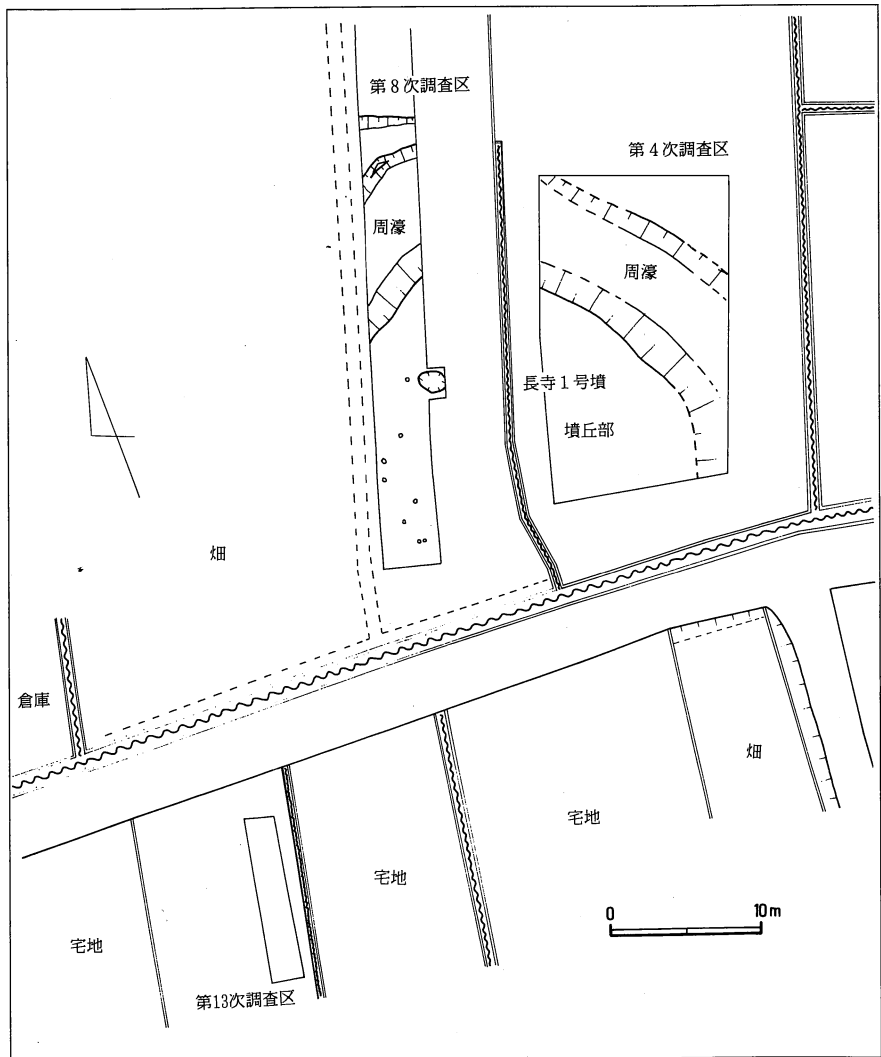


図1 第4・8・13次調査地点図 (S = 1/500)

きに築いた後円部に対して第4・8次調査地点で検出した前方部は北向きになり、北向きに前方部を築いた東大寺山古墳や和爾下神社古墳とも一致することになる。第13次調査地点は、そうした長寺1号墳の墳形プランを検証する機会でもあった。

2. 調査の結果

第13次調査地点は、前述した長寺1号墳を確認した第4・8次調査地点の南西側10mほどの隣接地にあたり、長寺1号墳にともなう遺構を検出する可能性があった。調査は幅2m、南北15mにわたって調査を実施したが周濠状の落ち込みは検出できなかった。

(松本)



写真1 調査区全景(北から)

II 第14次調査

1. はじめに

長寺遺跡は、天理市北部の櫛本町に所在する弥生時代中・後期の集落、古墳時代中・後期の埋没古墳、それに奈良・平安時代の長寺廃寺などが重複して存在する複合遺跡であることが知られている。

長寺遺跡の周辺には、北東に弥生時代中期から古墳時代にかけての集落遺跡として知られている和爾・森本遺跡が存在する。東の丘陵地帯には古墳時代前期から中期の東大寺山古墳群(東大寺山古墳、赤土山古墳、和爾下神社古墳、櫛本墓山古墳)が存在しており当該遺跡の調査で発見された長寺古墳群との関連が考えられる古墳群である。また奈良時代の寺跡として檜池廃寺、柿本廃寺、在原廃寺があり飛鳥・藤原・平城京周辺および斑鳩について寺院の分布が密な地域であるが長寺廃寺もこれらに含まれ有機的な関係が考えられる。

これまでの14次に及ぶ発掘調査の成果から、弥生時代では中期後半を主体として後期末まで継続する集落跡であることが判明しつつある。また、古墳時代では前期初頭とされる長寺1号墳をはじめとして中・後期まで継続する長寺古墳群が確認されており、径20m前後の規模の小型の円墳や方墳で形成されるものと考えられているが、いずれも後世の削平

により周濠部分のみ残る埋没古墳であるため、今後の調査により確認される古墳の数が増えることも予想されよう。次に、長寺廃寺については、1980年の第1次調査（泉 1980）で大型掘立柱建物を検出して以来目立った遺構の検出は無かったが、1992年の第8次調査（松本 1993）では寺域の北限を区画すると考えられる東西に延びる2条の並行する溝を検出しており、寺の範囲を考えるうえで重要な発見であった。



図2 長寺遺跡と周辺の遺跡分布図 (S = 1/10000)

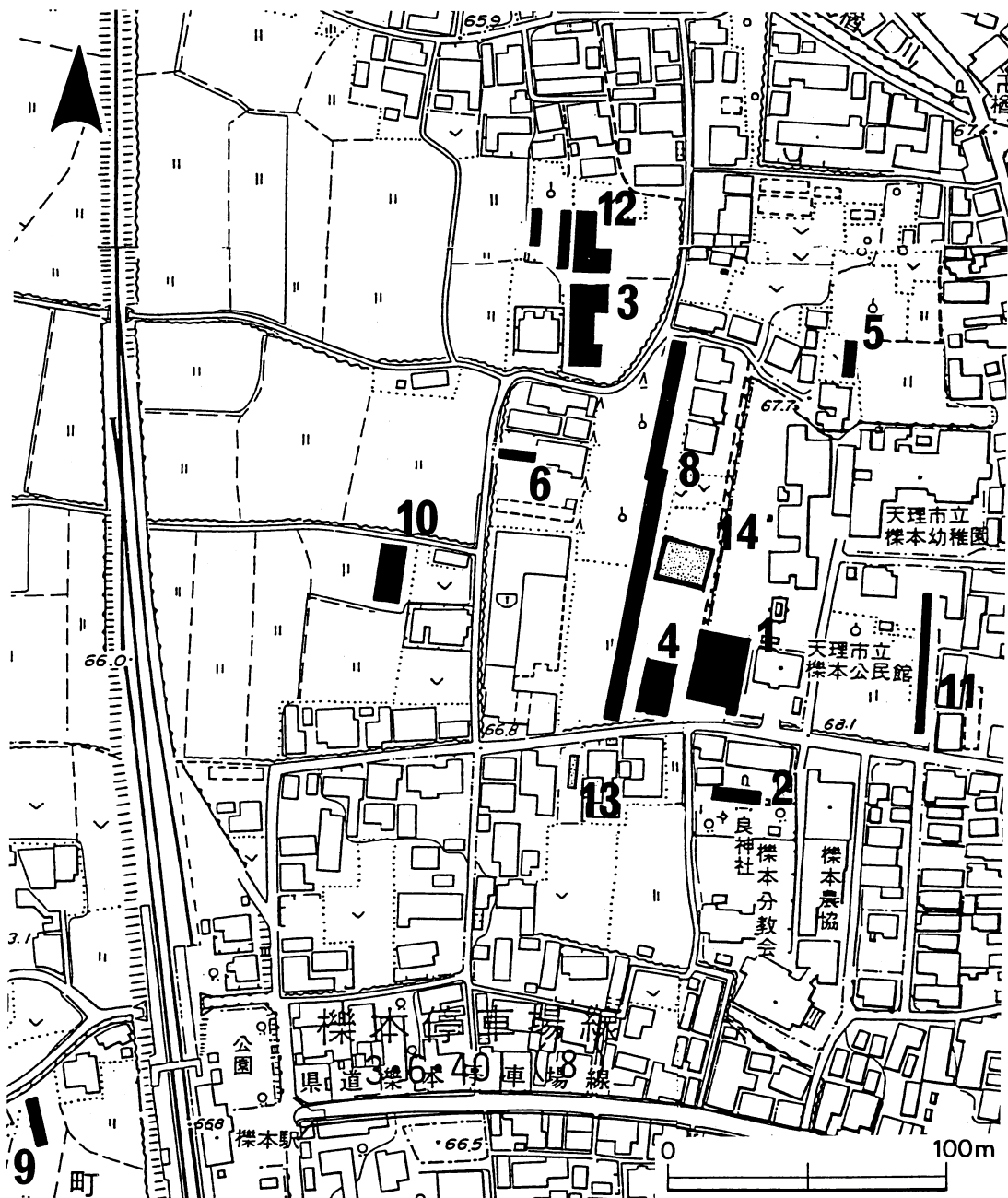


図3 今年度の調査地およびこれまでの調査地点位置図 (S = 1/2500)

平成6年度の実施した今回の調査では、第8次調査時に検出された長寺廃寺の北限部分を区画する東西溝の東側を調査対象とし、その延長線上での確認を目的として調査を進行した。なお、今回の第14次調査は個人住宅の建築に伴うものであり、調査対象地に東西14m、南北12mの調査区を設定して実施した。現地における調査は平成6年7月4日より開始し、8月23日にすべての作業を終了した。調査面積は約168㎡であった。(青木)

2. 調査の概要

(1) 基本層序

当調査地における基本的な堆積層序は以下のような状況となっている。

第I層：黒褐～褐灰色砂質土 層厚20cm前後。表土層および旧耕作土である。

第II層：褐色砂質土 層厚10cm前後。床土となる堆積土である。

第III層：灰褐色砂質土 層厚15～20cm。上面において南北方向を基調とした小溝群が検出されている。東半分の地区は西半分の地区よりレベル的に高く中央の暗渠を挟んで段差が認められる。概ね近世の耕作に伴う遺構群と考えられる。

第IV層：黒褐色粘質土 層厚20cm前後。上面では第III層と同様に南北方向を基調とした小溝群が検出されているが、上位の遺構面とは異なり小溝の重複関係の密度が濃く下位の遺構面を著しく削平しながら継続的に耕作がおこなわれていたことが窺える。なお、この層では中世前期を主体とする土師器等の小片を包含する。

第V層：暗褐～褐色砂質土 層厚15cm前後。上面において、柱穴、小穴、溝S D03等の平安前期を主体とする遺構を検出している。なお、この層には弥生中・後期～古墳後期、奈良～平安初頭の土器類が包含されており、下位では次の第VI層の地山となっている。

第VI層：明黄褐色シルト（地山） 上面では東西溝S D01およびS D02が検出されている。他にも古墳周濠となるS X02が検出され、上部から掘削された遺構により地山面には旧地形を留めてはいない。









(2) 検出遺構

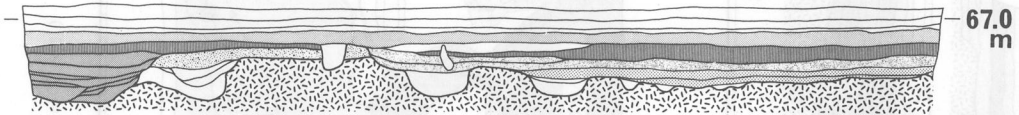
今回の調査では、第III層、第IV層、第V層、第VI層の各上面で遺構の検出が見られた。上部の第III層および第IV層上面では中・近世の素掘り小溝群を検出し、現在の磁北に対してやや東へ振る地割と同じくして小溝群が存在することを確認している。

また、第V層上面では掘立柱建物を形成すると思われる柱穴や小穴も多く検出しているが、建物の構成については不明瞭である。時期的には、概ね平安前期～中世初頭の時期幅で捉えられよう。

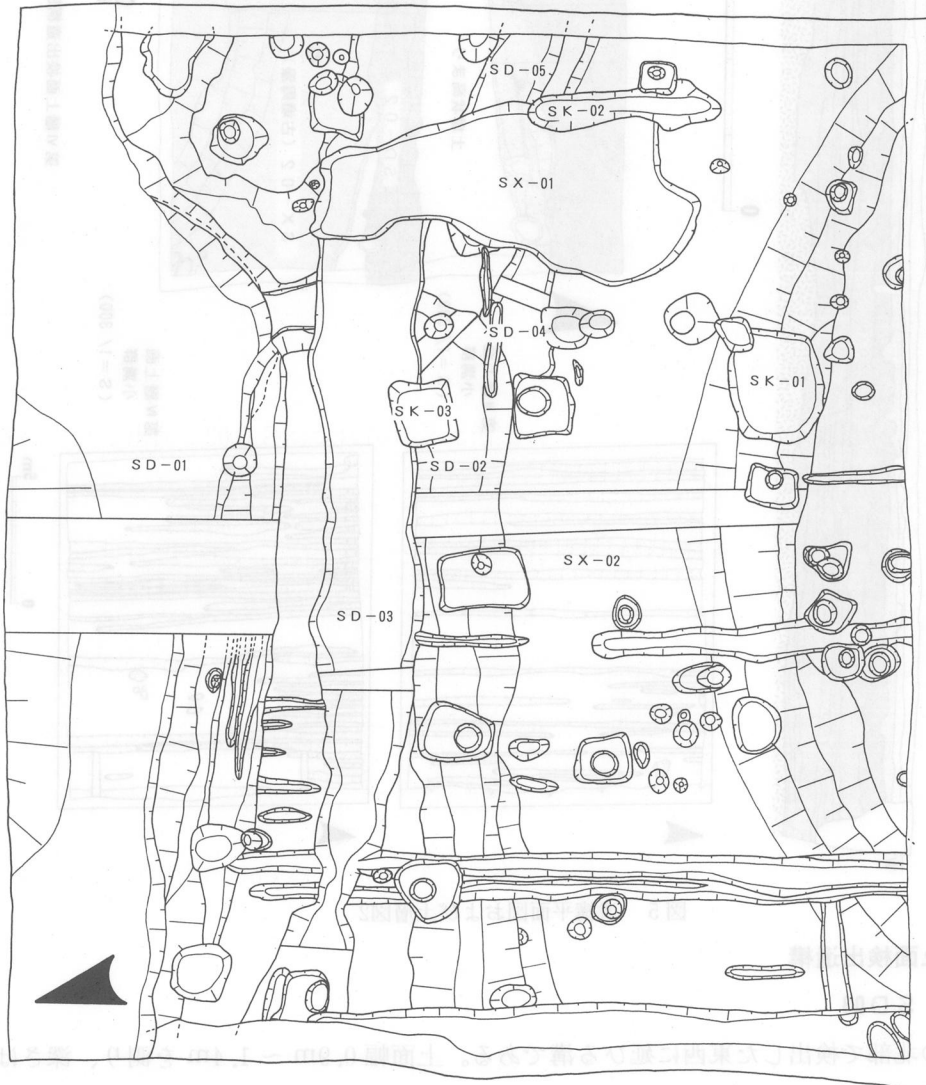
最下層遺構面となる第VI層の地山直上面では、長寺廃寺関連の遺構や埋没古墳の周濠等が検出されており、遺構より出土した遺物の量も全体の8割が最下層遺構検出のもので占められていた。

ここでは、第V層および第VI層上面遺構面検出の主要遺構についてのみその概要を記しておく。

- | | | | |
|---|---|---|---|
|  第Ⅰ・Ⅱ層
(耕作土・床土) |  第Ⅳ層
(黒褐色粘質土) |  SD-01 |  土堤状高まりに伴う盛土 |
|  第Ⅲ層
(灰褐色砂質土) |  第Ⅴ層
(暗褐色砂質土) |  SX-02
(古墳周濠) |  第Ⅵ層
(地山) |



東壁土層図
(S=1/100)



第Ⅴ・Ⅵ層上面検出遺構図 (S=1/100)

0 5m

図4 遺構平面図および土層図1

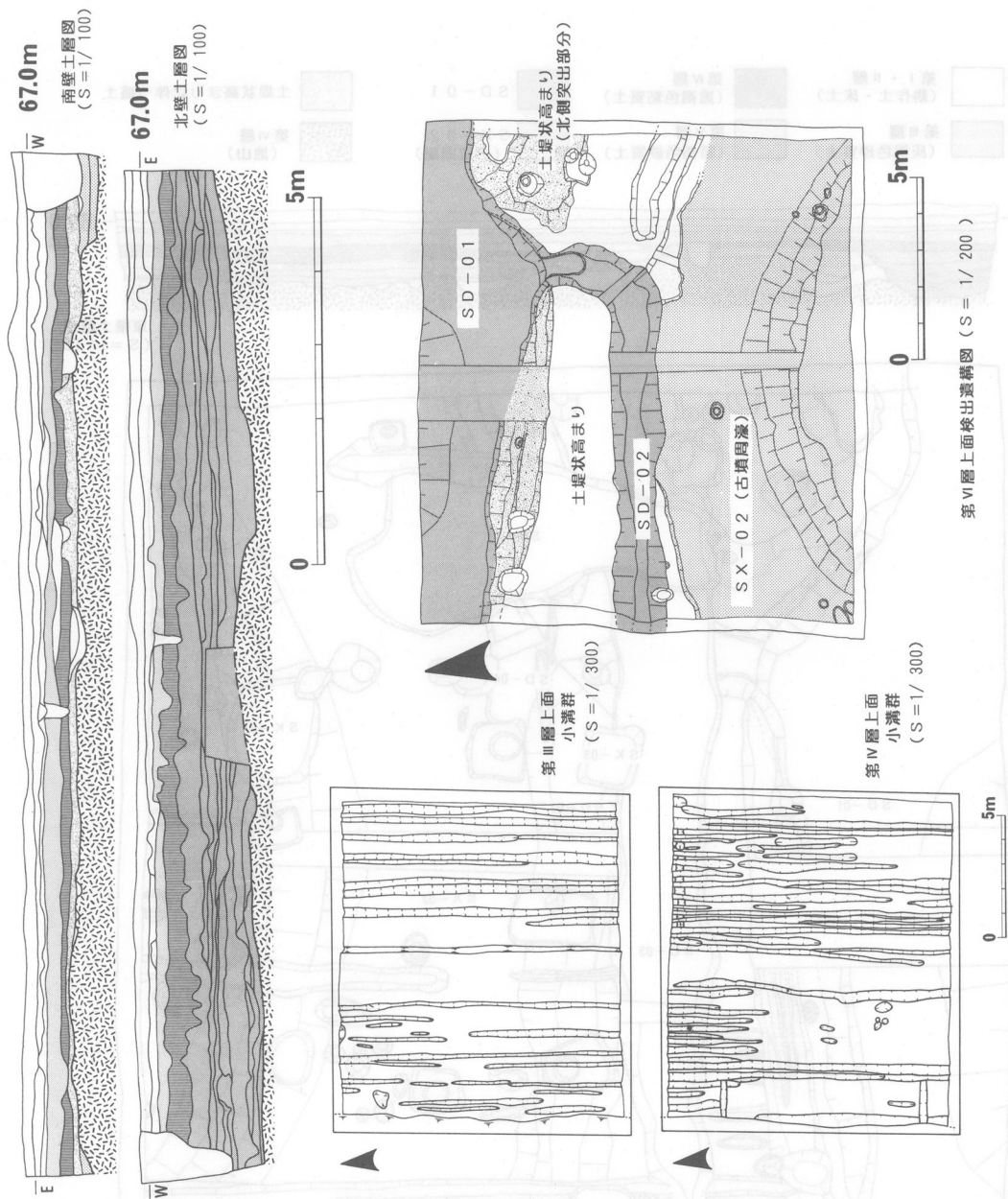
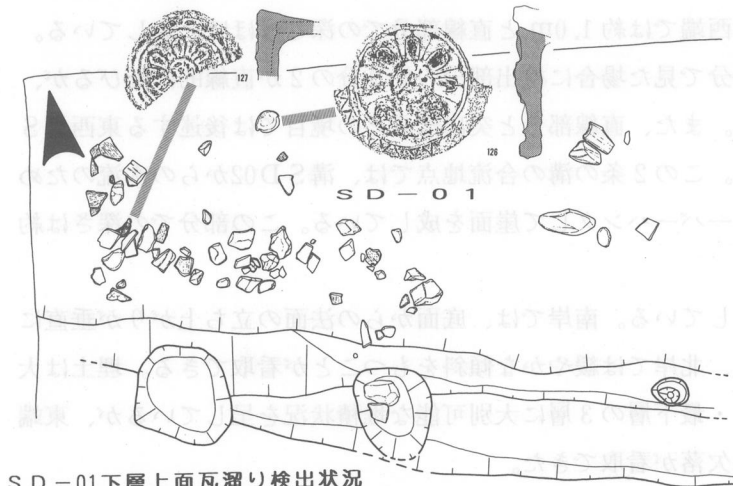


図5 遺構平面図および土層図2

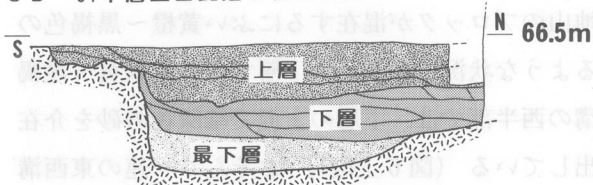
第V層上面検出遺構

東西溝 SD03

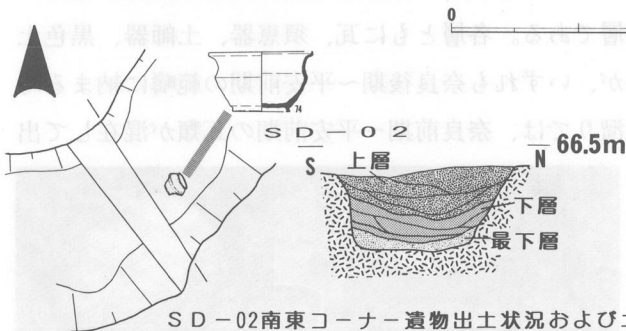
調査区の北部で検出した東西に延びる溝である。上面幅0.9m～1.4mを測り、深さは0.2m前後である。溝の底面は西側に向かい緩やかに傾斜をもつ。埋土は、暗褐～灰黄褐色砂質土で底面直上ではやや粘性を帯びる堆積土となっている。この埋土からは、土師器や須恵器の小片が出土するが、いずれも原位置を保つものは少なく、図10-86・87の須恵



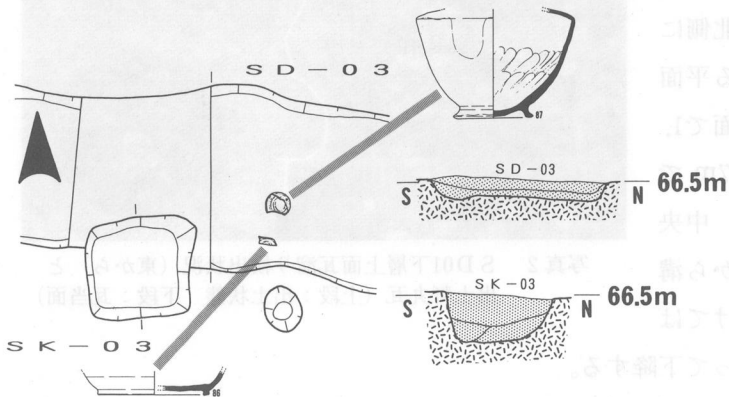
SD-01下層上面瓦溜り検出状況



SD-01中央南北アゼ土層図



SD-02南東コーナー-遺物出土状況および土層図



SD-03・SK-03遺物出土状況および土層図

図6 主要遺構検出状況および土層図(S=1/60・遺物はS=1/10)

器壺の体部と底部片のみ正置した状況で出土しているに過ぎない。また、これらの出土土器から、奈良後期～平安初頭の時期が考えられる。

方形土坑 SK03

前述したSD03の中央東寄りの南岸を切り込む一辺約0.8mの規模を呈する方形土坑である。断面形状は逆台形を示し、深さは約0.35mである。埋土は暗褐～黒褐色の砂質土を基調とし下半は粘性を帯びた土壌となっている。埋土の上部からは少量の須恵器坏の小片と土師器坏、甕、それに多量の製塩土器片が出土している(図11)。特に多量に出土した製塩土器片とほぼ完形の甕、坏あるいは碗等の器種構成は当土坑の性格付けを考えるうえで興味深い資料である。時期については概ね平安初頭頃と考えられよう。

第VI層上面検出遺構

東西溝 SD01

調査区の北端部分に位置する東西に延びる大溝である。北岸が調査区外へ延びるために平面規模について

は不明瞭であるが、幅は上面の検出幅で2.5~3.5mを測る。溝の深さは東端部で最も浅く約0.6mで中央で約1.1m、西端では約1.0mと直線部分での深さはほぼ一定している。

なお、平面形状では南岸部分で見た場合に検出部分の約3分の2が直線的に延びるが、東端では北側に丸く突出する。また、直線部分と突出部分との境目では後述する東西溝SD02が北へ屈曲して連結する。この2条の溝の合流地点では、溝SD02からの水流のためか連結部分の両端の岸ではオーバーハングして崖面を成している。この部分での深さは約0.8mである。

断面形状はほぼ逆台形を呈している。南岸では、底面からの法面の立ち上がりが垂直に近く急角度であるのに対して、北岸では緩やかな傾斜をもつことが看取できる。埋土は大溝の直接部分では上層・下層・最下層の3層に大別可能な堆積状況を呈しているが、東端部分では最下層相当の埋土の欠落が看取できた。

次に各層の堆積土については、上層は地山のブロックが混在するにふい黄橙~黒褐色の粘砂質土であり、意図的に埋め戻しているような状況であった。下層では、暗灰黄~黒褐色の粗砂を多く含む粘砂質土である。大溝の西半部では、下層の上面で暗灰色の砂を介在し、これらに埋没する状態で瓦溜りを検出している(図6上段)。おそらく一連の東西溝の機能がこれらの瓦類の廃棄の後に停止したことを示すものと考えられよう。最下層は、暗褐色の粗砂を多く含む砂質土の堆積層である。各層ともに瓦、須恵器、土師器、黒色土器、灰釉陶器等の破片が出土しているが、いずれも奈良後期~平安前期の範疇に納まる時期で捉えられる。なお、下層上面の瓦溜りでは、奈良前期~平安前期の瓦類が混在して出土して若干の黒色土器や他地域産の須恵器を共伴している。

東西溝 SD02

調査区のほぼ中央に位置する東西に延びる溝である。東端では北側に屈曲し前述のSD01に連結する平面形状を呈する。溝の幅は検出面で1.0~1.5m、屈曲部分では約0.7mである。深さは西端で約0.6m、中央で約0.8mを測り、屈曲部分から溝SD01との間の合流地点にかけては0.9~1.0mと北側へ傾斜をもって下降する。

断面形状は逆台形を呈し、埋土はSD01と同様に上下3層に大別可能である。上層は灰黄褐~黒褐色の砂混じり粘質土、下層は黄灰~褐灰色砂混じり粘質土で下部では暗青灰色



写真2 SD01下層上面瓦溜り検出状況(東から)と出土軒丸瓦(上段:出土状態 下段:瓦当面)

砂混じり粘土の堆積が認められる。屈曲コーナー部分では、図10-74の壺がほぼ完形の状態で出土しているが、ほかはすべて小片を主体とした破片で占められている。最下層は緑灰色の細砂～粗砂で若干量の土器片を含んでいた。

遺物は、主として下層および最下層で出土しており、層順に時期が下るような出土土器の傾向は看取できず、常時帯水して溝に流れがあったことが窺える。

東西溝SD01-03間土堤状高まり

2条の東西溝に挟まれた部分と溝SD01南岸の北側突出部分では若干の盛土層が遺存し(図4-西壁土層図)、地山ブロック混じりの黄褐色砂質土の積み上げが部分的に見られる。これらの上部より掘り込まれた土堤状高まりに伴う柱穴等については、さらに上部から重複関係をもって掘削された遺構によって攪乱や削平を受けているため容易に確認することはできなかった。しかしSD01南岸突出部の中央で確認した柱穴については、盛土上面で検出しているため土堤状高まりに伴うものと考えられる。この柱穴は、直径0.7mの円形を呈し、深さ約0.8mを測る。突出部分から対岸の調査区外へ延びて対になる柱穴が存在するものと考えられ土橋あるいは門などの支柱の一角を成すものとも考えられよう。

溝SD05

溝SD01南岸突出部の南側に位置し、溝SD02の直線部分の延長線上に存在する浅い孤状を呈する溝である。深さは約0.15mで底面は凹凸が著しい。埋土は黒褐色の粗砂が混じる砂質土であり、土師器の小片がわずかに出土している。東側の土堤状高まりに建造物があったとすれば、それに伴う雨落ち溝としても考えられよう。

古墳周濠 SX02

調査区の南半に位置する弧状の大溝である。検出面では幅5m前後で巡るものと思われたが、外堤側の法面は西端の一端のみ遺存し、その他の部分はすべて後世の遺構もしくは寺院造営の際に削平されているため墳丘部分の輪郭が窺い知れる程度である。

深さ約0.3mと残りが悪く、黒褐色粘質土の埋土中には円筒埴輪、形象埴輪の破片や須恵器片が含まれる。墳丘側の輪郭から復元して径約15mの円墳と思われ、先述の出土遺物より古墳後期(6世紀後葉)の築造時期が考えられる。(青木)

(3) 出土遺物

包含層出土遺物(図7-1~28)

これらの遺物は、26を除き第V層出土である。26は、奈良～平安期の溝SD-02の埋土中に混入していたものである。

1~12は、白鳳期から平安時代初頭にかけての土師器である。1は、手捏ねの土器で、祭祀用具と考えられる。2は椀、3~9は坏である。9は内面に放射状の暗文風へう磨き

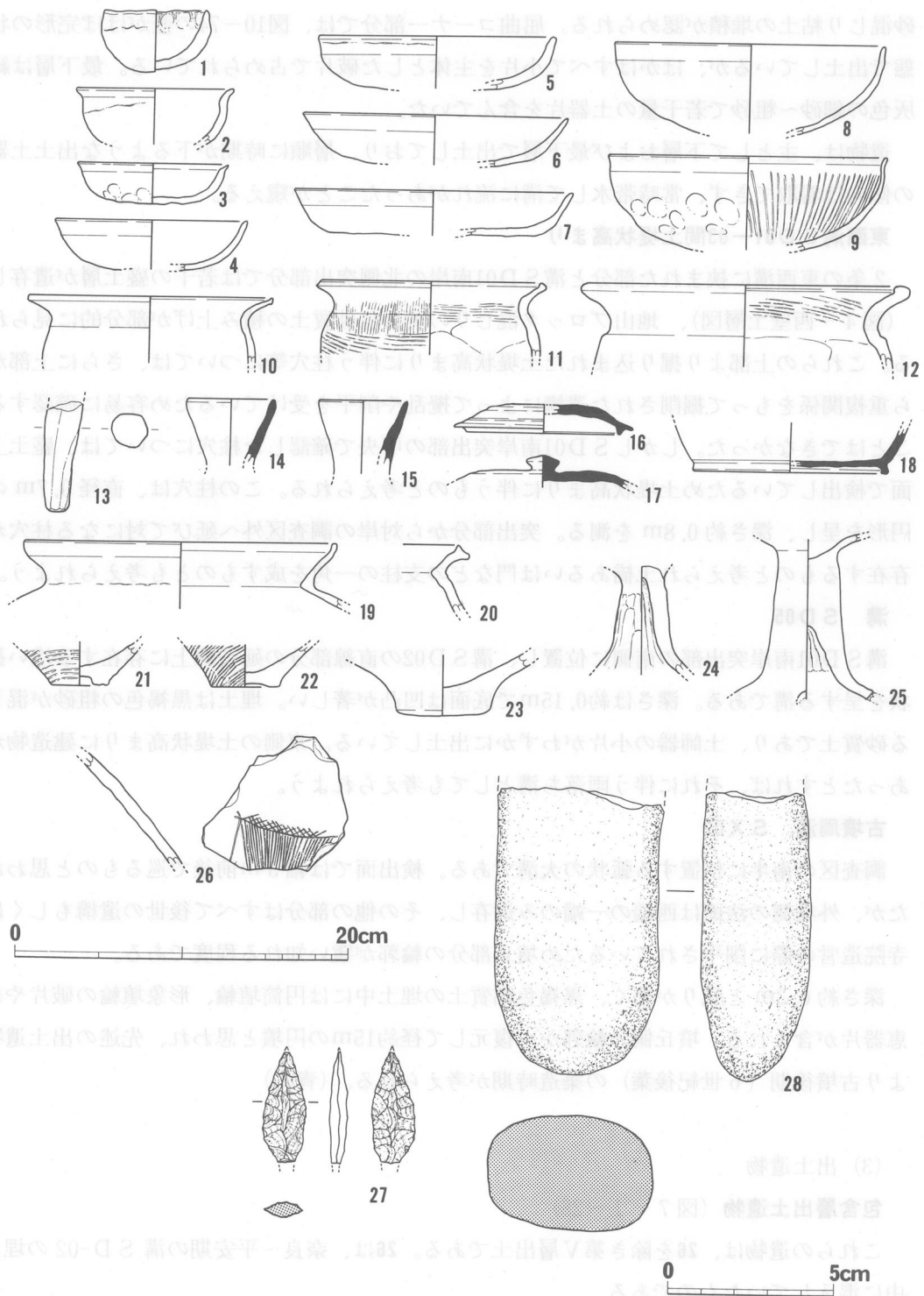


図7 包含層出土遺物実測図 (土器S=1/4・石器S=1/2)

が施され、外面には指頭圧痕が残り、飛鳥Vから平城IIに帰属すると考えられる。10～12は甕である。13は土馬の脚である。外面にへラ状工具による面取りが観察される。

14～18は須恵器である。14・15は平瓶の口縁部、16・17は坏蓋、18は坏身である。これらの時期は、白鳳期から奈良時代の範疇に収まる。

19～26は、弥生時代中期末から後期初頭にかけての土器である。19・21・22は、弥生時代後期の甕、20は中期の瀬戸内系甕、23は後期の壺、24・25は後期の高坏脚柱部である。26は絵画土器で、高床式建物の屋根の部分が描かれている。屋根部分の表現は通例の斜格子ではなく、直線のみで描かれており、類例が少ない。

27・28は、石器である。凶化可能なものすべてを提示した。27はサヌカイト製の石鏃である。先端および基部を欠損するもの、ほぼ全形がうかがえる良好な資料である。28は、刃部を欠く石斧の基部である。石材は不明であるが、砂岩系統の石材を使用していることがわかる。(市村)

東西溝S D 01出土土器 (図8-29～58)

大溝S D 01からは、土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器等が出土している。以下、出土層位別に概観しておく。

29～46は、最下層出土の土器である。

29・30は、土師器の皿と坏である。29には外面に指頭圧痕が残り、口縁端部はての字状を呈する。30は外面にへラ削り調整が見られる。

31～36は、黒色土器の碗である。いずれも内面黒色のA類である。

37は、灰釉陶器の碗である。高台の断面形状が三日月形を呈する古いタイプのものである。

38は、土馬の脚部の断片である。外面を丁寧にへラ状工具により面取りし、胎土は精良である。

39～45は、いずれも須恵器である。器種には坏、壺等があり、様々である。

46は、灰釉陶器の小型壺である。底部には糸切りの痕跡が見られる。

47～53は下層出土の土器である。

47・48は、土師器の坏である。口縁端部がやや外上方に屈曲、肥厚する。

49・50は黒色土器である。49は、全形が窺い知れる碗でA類である。50は、甕である。内外面ともに黒色を呈するが口縁部のみの小片であるためB類であるとの判断はできない。

51は、土師器の羽釜もしくは長胴甕の口縁から鏝にかけての破片である。

52は、口縁端部に重ね焼きの痕跡が残る須恵器の坏である。やや瓦質の焼成であり他地域産の須恵器であると思われる。

53は、須恵器の壺の底部で底面には糸切り痕が残る。

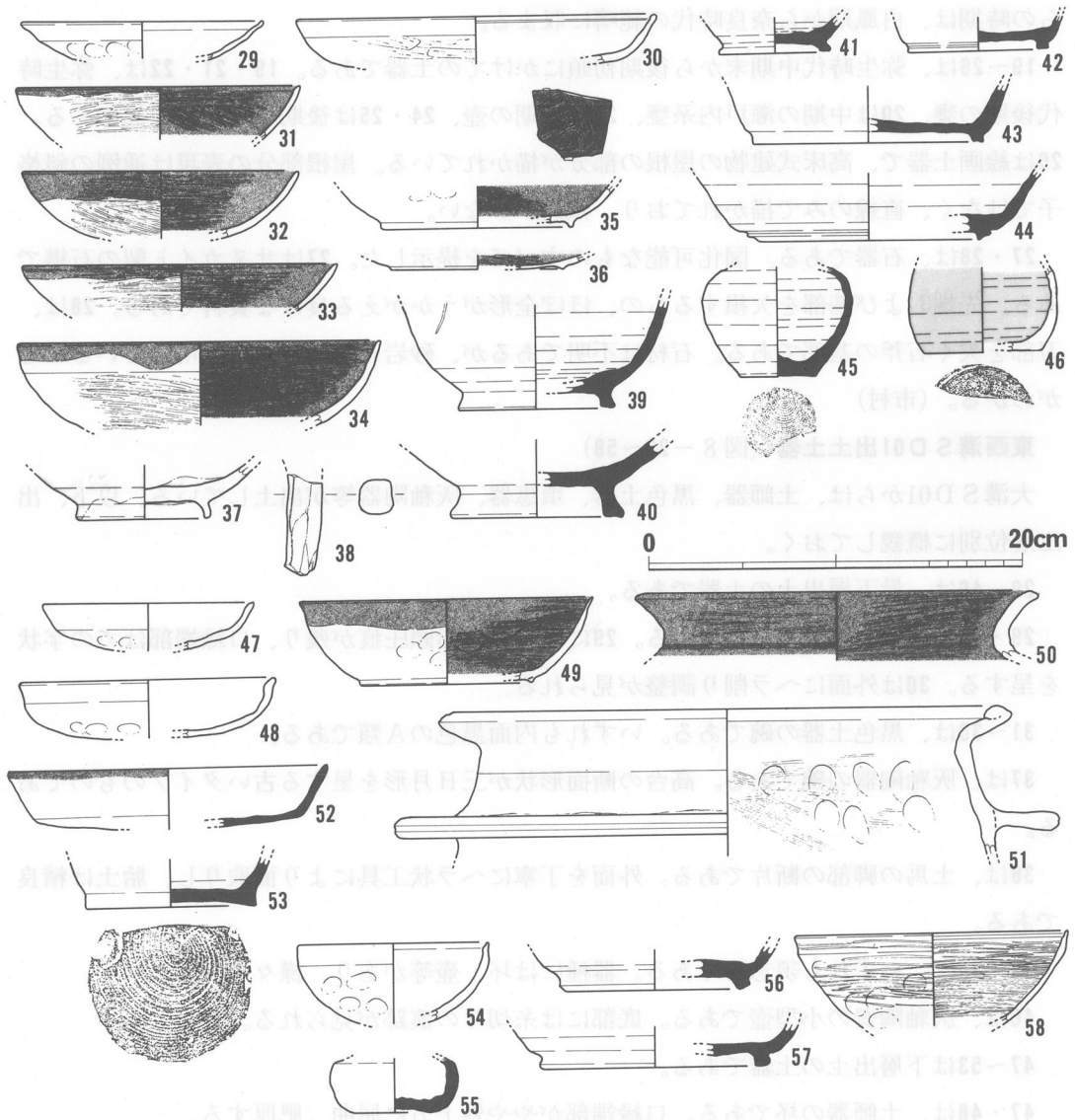


図8 SD-01出土土器実測図 (S = 1 / 4)

54～58は、上層出土の土器である。

54は、土師器の坏である。小型の丸底を呈し、焼成はやや軟質である。

55～57は、須恵器である。いずれも壺の底部片であるが大小の各種類が見られる。

58は、瓦器碗である。大溝S D01の埋土上層出土というよりは、上部の包含層もしくは素掘り小溝埋土出土品の混入であろう。(青木)

大溝S D01出土磚および埴

(図9-59・60)

59は、最下層から出土した磚である。厚さ3.0cmで、幅は最大17.0cmを測る。剥落した部分があり、また破片であることから詳細は不明であるが、無文の方形を呈するものと思われる。全体的に二次焼成を受けてはいるが、石材は輝石安山岩であることが看取できる。

60は、下層から出土した埴である。厚さ5.0cm、最大幅は12.0cmを測る。59と同様に無文方形を呈するものと思われる。灰黄色の色調を呈し、焼成はやや軟質であるが須恵質である。(田坂)

溝S D02出土土器 (図10-61～79)

61～66は、最下層より出土の土器である。

61～63は、土師器である。坏には大小があり、ともに精製品である。63の甕は口縁部を強くヨコナデし肩部付近で明瞭な稜が巡る。

64の黒色土器の碗は、大型品で内面に連結輪状文が見られるA類である。

65は、断面楕円形の把手が付く灰釉陶器の壺である。全体のプロポーションについては断片的な資料であるため不明である。

66は、須恵器の坏身である。小型無蓋のもので形態的に古い形式を示す。

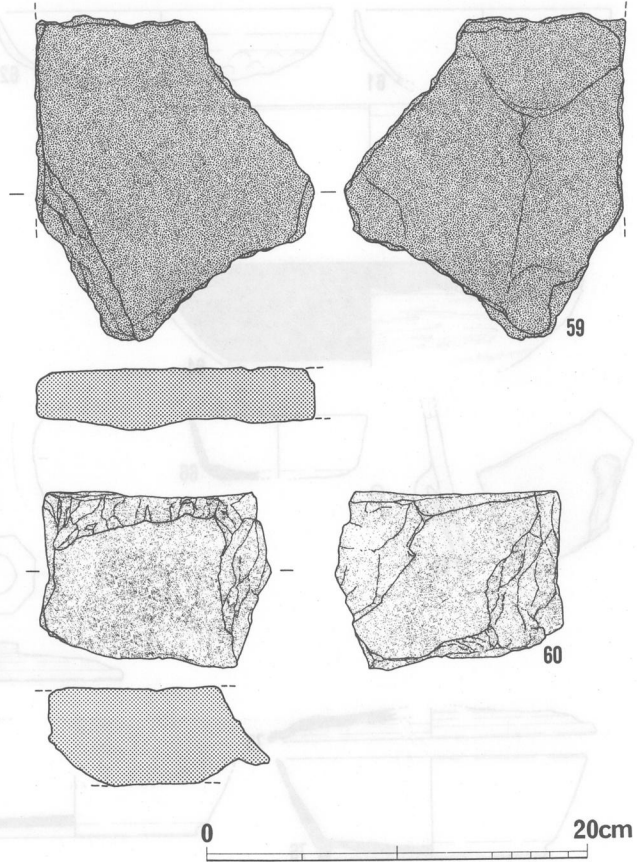


図9 SD-01出土磚および埴 (S=1/4)

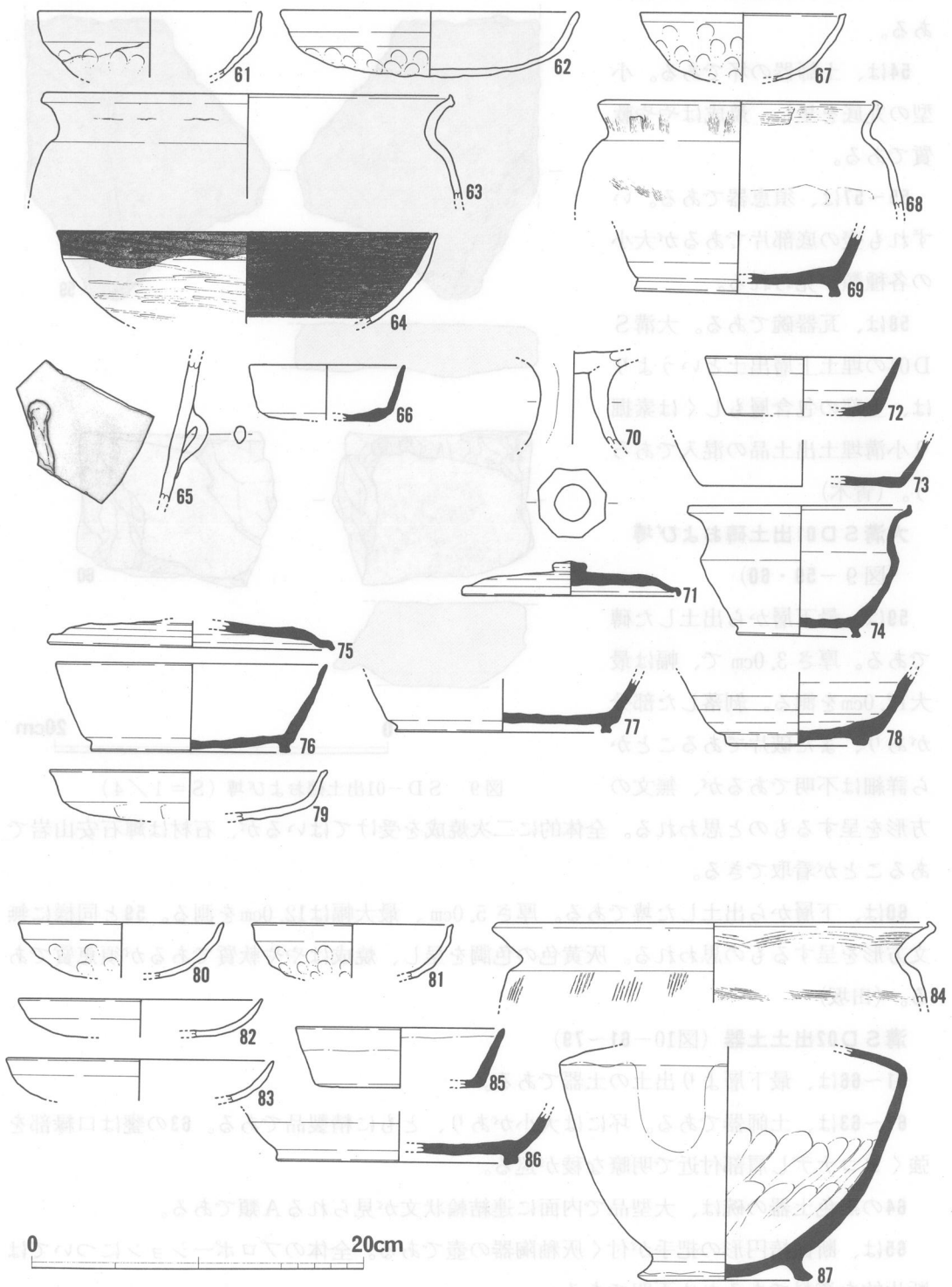


図10 S D-02・S D-03出土土器実測図 (S = 1 / 4)

67～74は、下層より出土した土器である。

67・68・70は、土師器である。67の坏は外面に多くの指頭圧痕が残る粗製品であり、68の甕はやや長胴気味の体部を呈する。70は、高坏の脚柱部である。外面はヘラによる面取り調整がなされ八角形の横断形状をもち短脚である。

69・71～74は須恵器である。全形が窺えるものは少ないが、71の坏蓋は偏平な擬宝珠状つまみが特徴的であり、74の壺とともに奈良前期の土器と即断できるものである。

75～79は、上層出土の土器である。

75～78の須恵器は、どれも奈良時代の須恵器である。

79の土師器坏は、底部外面をヘラナデで仕上げ、口縁を強くヨコナデして端部を短くつまみ出している。

溝S D 03出土土器 (図10-80～87)

80～84は、土師器である。

坏には小型で碗形の80・81と皿状の82・83の2種類があり、いずれも指頭圧、ナデで仕上げた粗製品である。84の甕は肩の張る形態のものでやや長胴の体部をもつと思われる。

85～87は、須恵器である。

85の坏身には、口縁端部の内外面に重ね焼きの痕跡が残る。また、原位置を保って出土した86・87の壺はともに底部のしっかりとしたものである。体部のみ完存する87の壺はおそらく長頸壺であると思われる。

方形土坑S K 03出土土器 (図11-88～110)

88～103は、土師器である。

坏の形態では、小型碗形の体部外面に指頭圧痕の見られる88～94と皿状で浅く底部外面をヘラ削りする95～99の2種類が認められる。

甕にも大小が見られ、小型の100・101と大型の102・103がある。小型品では形態差が見られ100のような長胴タイプと101のような体部に丸みをもつものの両者がある。

104～106は須恵器である。いずれも小片であるため全形の窺えるものは皆無である。また、当遺溝出土土器のうちに占める割合も極めて低い。

107～110は製塩土器である。どれもこの土器の特徴である二次焼成による器面の赤色変化が見られる。形態的には図示した4種類が認められるが、107のような外面にタタキ成型痕の見られるものの比率は低い。

古墳周濠S X 02出土遺物 (図11-111～125)

古墳周濠S X 02の埋土からは111～113の須恵器や114～124の埴輪類、それに125の土製品等が出土している。全体の出土量は極めて少ないものの、一定の時期幅での片寄りが見られることからほとんどが当古墳に伴う遺物であると考えよう。

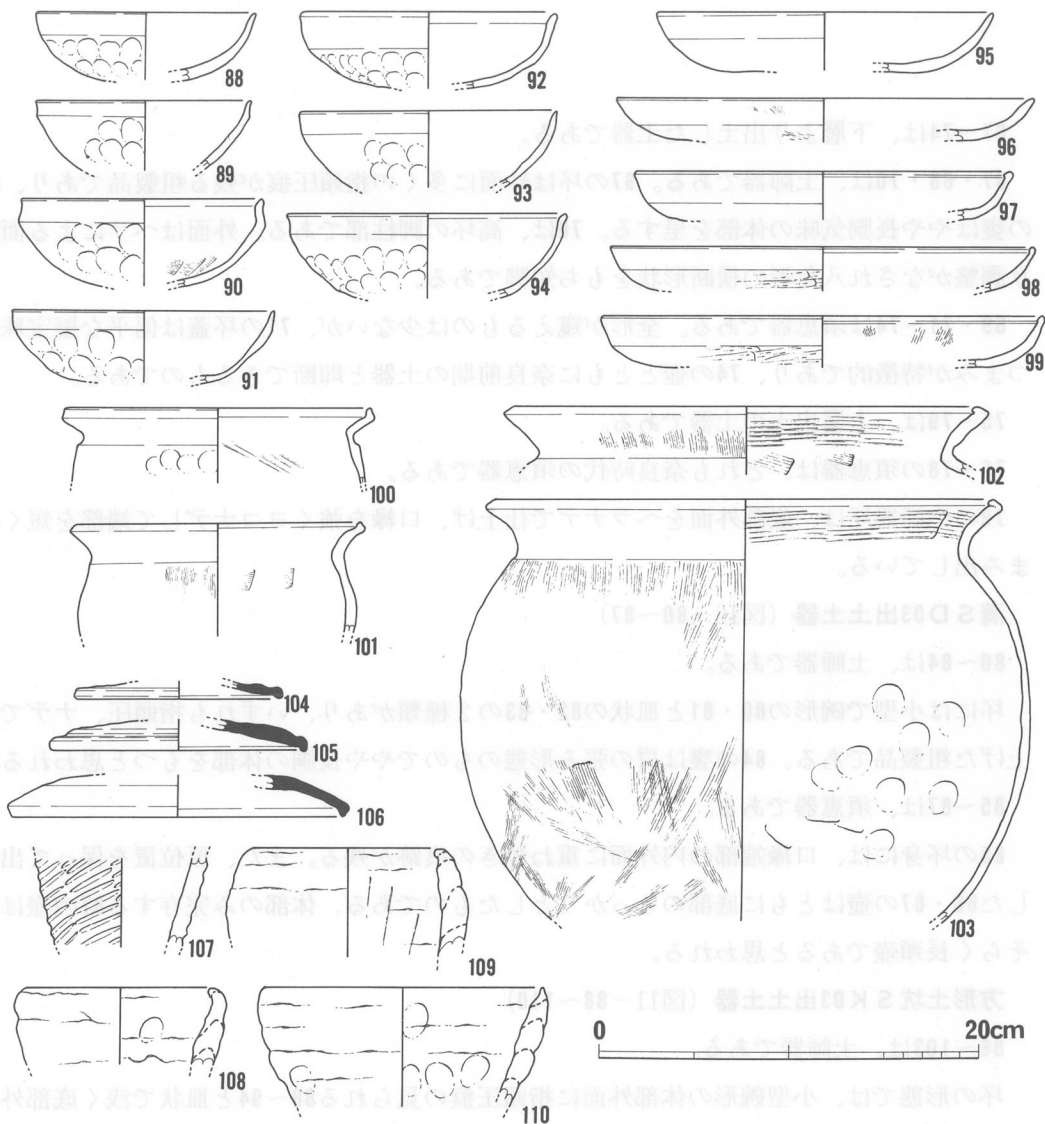


図11 SK-03出土土器実測図 (S = 1/4)

111 ~ 113 は、須恵器である。

111 の坏蓋は天井部と口縁部の間の稜が鈍く丸みをもった体部を呈する。口縁端部は丸く、口径はやや大きい。112 の坏身は小型で底部の約 3 分の 1 に回転ヘラ削りする。113 は小片であるが、大型で坏部外面の受け部付近に櫛歯列点文が巡ることなどから有蓋高坏の坏部と思われる。

114 ~ 119 は、円筒埴輪の破片である。いずれも焼成は須恵質であり、透かしは円形を呈する。外面はすべて一次調整のタテ・ナナメハケ、内面は指頭ナデあるいは外部同様に単調なハケ仕上げである。

121 は朝顔形埴輪の頸部付近の小片である。頸部に取りつく突帯の端面には刻み目が巡る。

120・122 は、盾形埴輪、衣笠形埴輪とその立ち飾り等の一部と思われるものの小片で

ある。いずれも線刻による描写がなされている。123は衣笠形埴輪の笠部の口縁部である。外面にタテハケ内面にはヨコ方向のナデが看取り、焼成は須恵質である。

124は、盾形埴輪の鱗部(盾の部分)の接合状態がわかる資料である。鱗部接合に先立ち、接合面にヘラ状工具の先端で筋目を施しているのを看取できるものである。

125は、土製の紡錘車である。直径4.0cm前後で厚さ1.8cmを測る。表面および裏面の円孔の周辺はどちらも平坦に仕上げている。

(青木)

瓦類 (図13~16)

今回の調査では、包含層および各遺構埋土より多量の瓦片が出土しているが、ここでは128・139の2点を除き、SD01出土の瓦類を中心として概観しておく。

a. 軒丸瓦

(図13-126~131)

126は、周縁に凸線鋸歯文をもつ有子葉単弁八葉蓮華文軒丸瓦であり、いわゆる山村廃寺式と称されるも

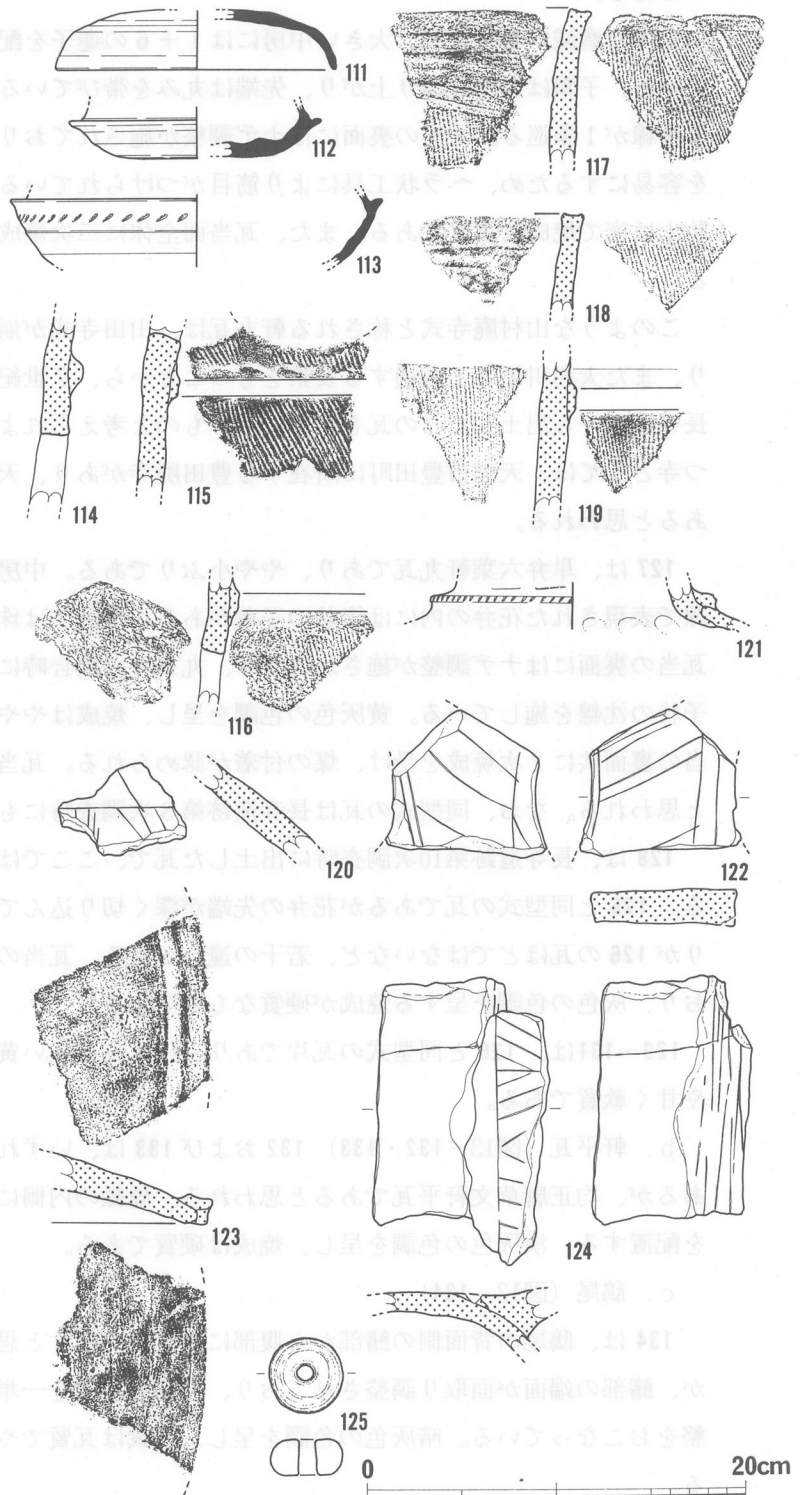


図12 SX-02出土遺物実測図 (S = 1 / 4)

のである。

全体に磨滅が著しいが、大きい中房には1+6の蓮子を配し、その蓮子は圏線で囲まれている。子葉は大きく盛り上がり、先端は丸みを帯びている。また、周縁と内区とを区切る圏線が1条巡る。瓦当の裏面にはナデ調整が施されており、丸瓦との接合部分には接合を容易にするため、へら状工具により筋目がつけられている。淡い黄橙色の色調を呈し、胎土は密で焼成は良好である。また、瓦当面全体に二次焼成を受け、煤の付着が認められる。

このような山村廃寺式と称される軒丸瓦は、山田寺式が崩れた段階に位置付けられており、また大和川原寺と共通する要素をもつことから、7世紀後半に位置付けられている。長寺遺跡から出土したこの瓦も、同時期のものと考えられよう。また、同じ型式の瓦をもつ寺としては、天理市豊田町に所在する豊田廃寺があり、天理市周辺の在地色の強い瓦であると思われる。

127は、単弁六葉軒丸瓦であり、やや小ぶりである。中房には1+5の蓮子を配し、凸線で表現された花卉の内には棒状の子葉がある。外区には珠文が巡り周縁は素文である。瓦当の裏面にはナデ調整が施されており、丸瓦との接合時に丸瓦凹面にへら状工具で斜格子状の沈線を施している。黄灰色の色調を呈し、焼成はやや甘く軟質である。瓦当面・瓦当の裏面共に2次焼成を受け、煤の付着が認められる。瓦当文様から平安時代後期のものと思われる。なお、同型式の瓦は長寺遺跡第3次調査時にも出土している。

128は、長寺遺跡第10次調査時に出土した瓦で、ここでは参考までに提示したものである。126と同型式の瓦であるが花卉の先端が深く切り込んでいることや、子葉の盛り上がりが126の瓦ほどではないなど、若干の違いがある。瓦当の裏面にはナデ調整が施されており、灰色の色調を呈する焼成が硬質なものである。

129~131は、126と同型式の瓦片であり、いずれも淡い黄橙色の色調を呈し、焼成はやや甘く軟質である。

b. 軒平瓦 (図13-132・133) 132および133は、いずれも小片であり、詳細は不明であるが、均正唐草文軒平瓦であると思われる。周縁の内側に界線をもち、その内に唐草文を配置する。淡灰色の色調を呈し、焼成は硬質である。

c. 鷗尾 (図13-134)

134は、鷗尾の背面側の鰭部から腹部にかけての断片と思われる。器面の剝落が著しいが、鰭部の端面が面取り調整されており、内面に8条を一単位とするクシ状工具による調整をおこなっている。暗灰色の色調を呈し、焼成は瓦質でやや硬質な仕上がりとなっている。

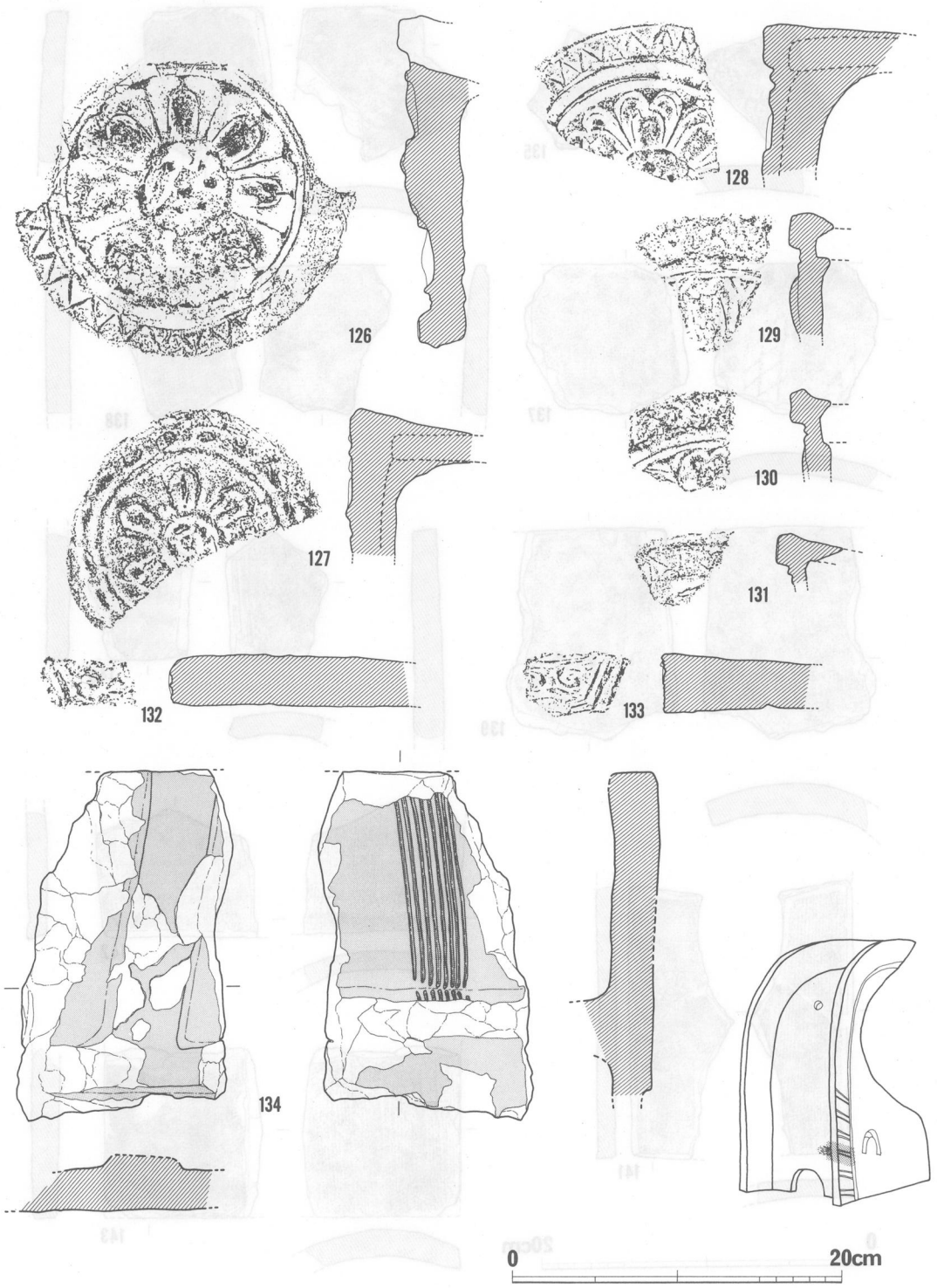


图13 出土瓦類実測図1 (S = 1 / 4)

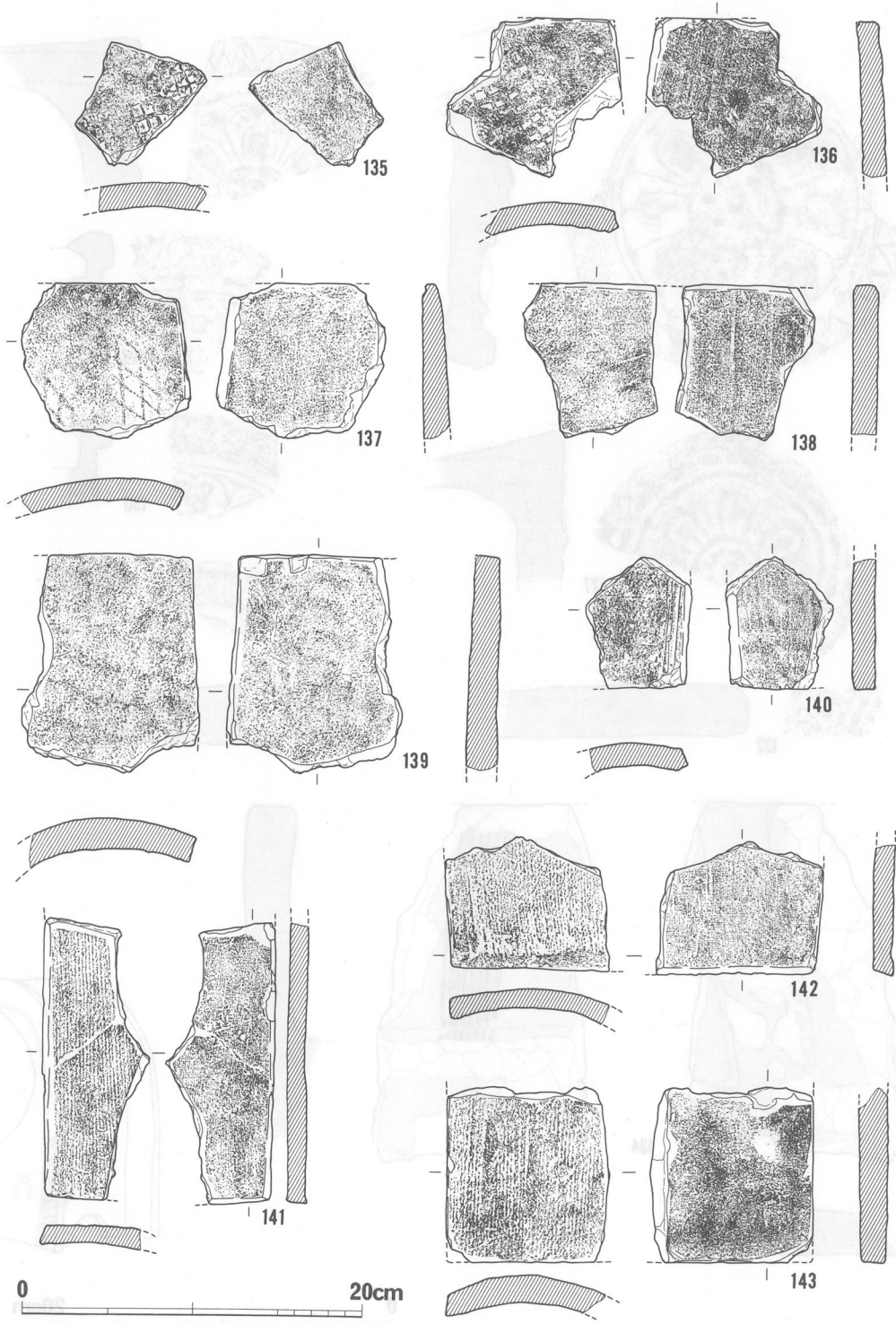


图14 出土瓦類実測図2

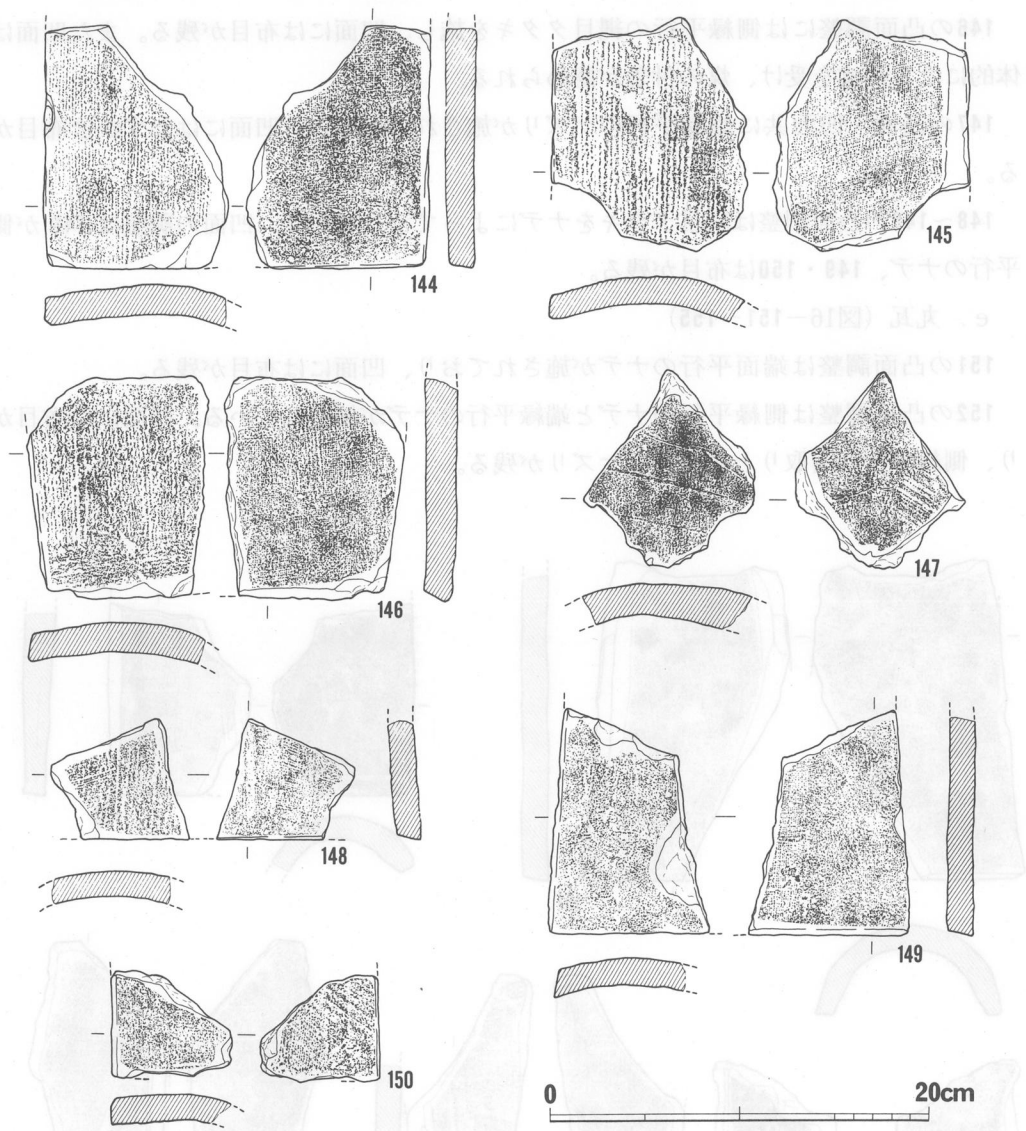


図15 出土瓦類実測図3 (S=1/4)

d. 平瓦 (図14-135~143・図15-144~150)

135~137は、凸面に格子目タタキ、凹面には布目が残る。

138・140は、凸面に端縁平行のナデを施し、凹面には布目が残る。

139は、S D 03出土で凸面に端面平行のナデを施し、凹面には側縁平行の板ナデを施す。

141・142は、凸面に縄目タタキを施し、凹面には布目が残る。

143の凸面調整は、141・142と同じであるが、凹面は布目を消すためのナデを施す。

144の調整は凸面凹面共に 141 と同じである。

145は、凸面調整として側縁平行の平行タタキを施し、凹面には布目が残る。

146の凸面調整には側縁平行の縄目タタキを施し、凹面には布目が残る。また凹面は全体的に2次焼成を受け、煤の付着が認められる。

147の凸面・凹面共に端縁平行のケズリが施されているが、凹面にはわずかに布目が残る。

148~149の凸面調整は縄目タタキをナデによって消しており、凹面の調整は148が側縁平行のナデ、149・150は布目が残る。

e. 丸瓦 (図16-151~155)

151の凸面調整は端面平行のナデが施されており、凹面には布目が残る。

152の凸面調整は側縁平行のナデと端縁平行のナデが施されている。凹面には布目が残る、側縁平行の面取りと思われるケズリが残る。

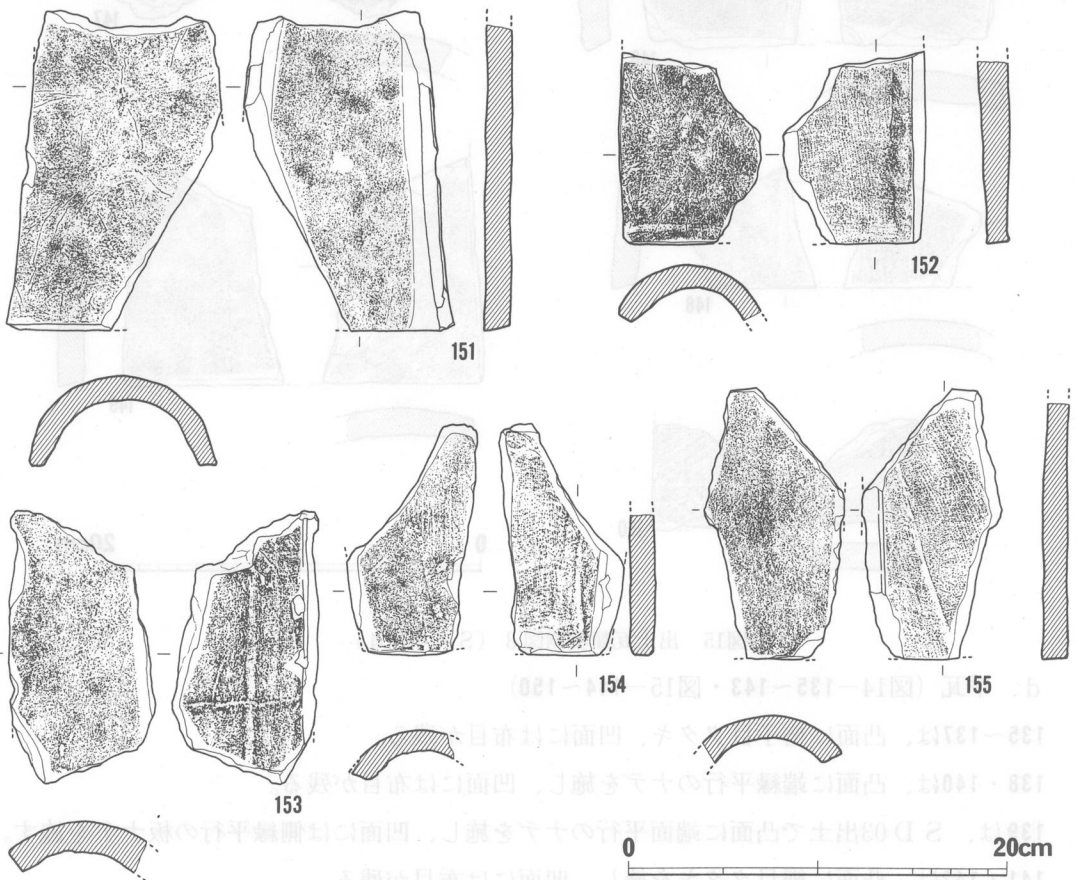


図16 出土瓦類実測図4 (S=1/4)

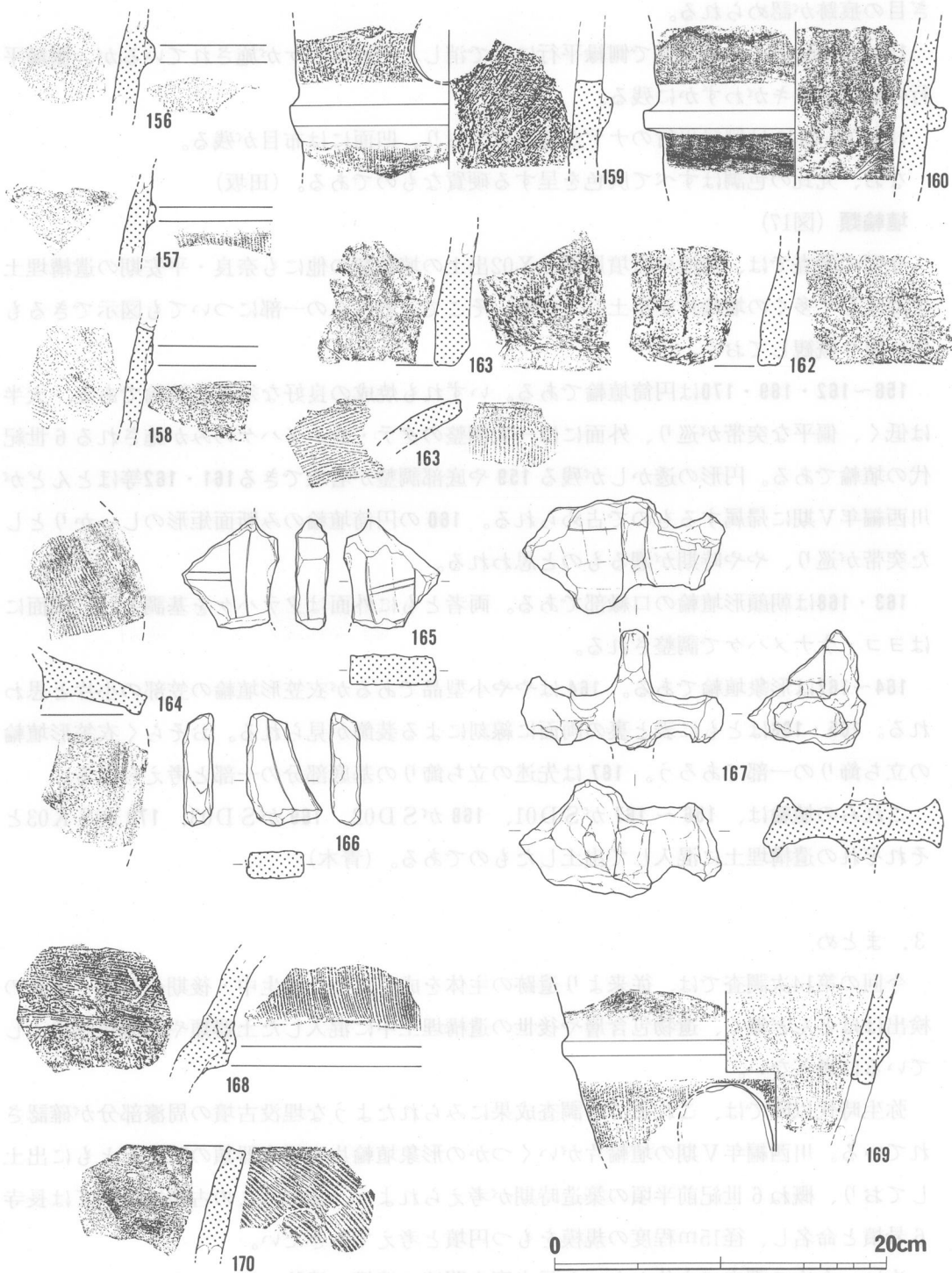


図17 出土埴輪類実測図 (S = 1 / 4)

153の凸面調整はナデによって縄目タタキがわずかに残る。凹面には布目および桶の継ぎ目の痕跡が認められる。

154は凸面をクシ状工具で側縁平行になで消し、凹面はハケが施されているが、側縁平行の縄目タタキがわずかに残る。

155の凸面には側縁平行のナデが施されており、凹面には布目が残る。

なお、丸瓦の色調はすべて灰色を呈する硬質なものである。(田坂)

埴輪類 (図17)

今回の調査では、前述の古墳周濠S X02出土の埴輪類の他にも奈良・平安期の遺構埋土に混入して多くの埴輪片が出土している。そこで、それらの一部についても図示できるものに限り概観しておく。

156～162・169・170は円筒埴輪である。いずれも焼成の良好な須恵質埴輪である。大半は低く、扁平な突帯が巡り、外面には一次調整のタテ・ナナメハケのみが施される6世紀代の埴輪である。円形の透かしが残る159や底部調整が看取できる161・162等ほとんどが川西編年V期に帰属するもので占められる。160の円筒埴輪のみ断面矩形のしっかりとした突帯が巡り、やや時期が遡るものと思われる。

163・168は朝顔形埴輪の口縁部である。両者ともに外面はタテハケを基調とし、内面にはヨコ・ナナメハケで調整される。

164～167は形象埴輪である。164はやや小型品であるが衣笠形埴輪の笠部の小片と思われる。165・166はともに表と裏の両面に線刻による装飾が見られる。おそらく衣笠形埴輪の立ち飾りの一部であろう。167は先述の立ち飾りの基底部分の一部と考えられる。

これらの埴輪は、156～167がSD01、168がSD02、169がSD03、170がSK03とそれぞれの遺構埋土に混入して出土したものである。(青木)

3. まとめ

今回の第14次調査では、従来より遺跡の主体を成していた弥生中・後期の遺構・遺物の検出はほとんど無く、遺物包含層や後世の遺構埋土中に混入した土器類や石器類が出土しているに過ぎない。

弥生時代以降では、これまでの調査成果にみられたような埋没古墳の周濠部分が確認されている。川西編年V期の埴輪片がいくつかの形象埴輪片や須恵器類の破片とともに出土しており、概ね6世紀前半頃の築造時期が考えられよう。また、この古墳については長寺6号墳と命名し、径15m程度の規模をもつ円墳と考えておきたい。

次に、今次の調査で主体となった長寺廃寺関連の遺構・遺物についてまとめておく。まず検出遺構で特筆すべきは東西溝SD01およびSD02の2条の平行する溝である。いずれ

も寺域北限を区画する意図で掘削された溝であるが、調査区東端で連結して北側に門あるいは土橋等の構築物が設置されている点が注目される。これらの帰属時期であるが、先述の2条の東西溝の掘削にあたってはほぼ同時期で同時併存していたことが考えられるため後述する出土瓦類や土器類の時期から考えて概ね7世紀後半～8世紀初頭頃と思われる。次に、2条の東西溝のその後については南側のS D02が先に埋没

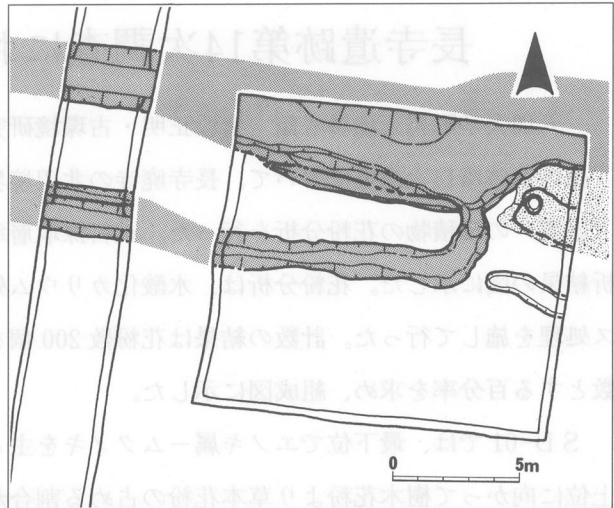


図18 長寺廃寺北限の溝および推定北門の一角 (S=1/300)

し、北側のS D01が同様に埋没してゆくものの再度掘削され寺域北限区画溝としての機能から、条里制に伴う五条五里22坪の中央区画の溝として変容したものと考えられよう。これらの転換時期は10世紀前後の頃と考えられ、寺院から荘園への土地利用の変化に呼応するものと据えておきたい。

出土遺物では、長寺廃寺創建時に近いものとして、周縁に凸線鋸齒文をもつ有子歯単弁八葉蓮華文軒丸瓦があり、山村廃寺式に相当する。この型式の瓦は、市内でも豊田廃寺で出土しており、いずれも7世紀後半頃の時期のものである。当廃寺を含め、天理市北部から奈良市南部にかけての山麓沿いには多くの古代寺院の分布が知られ、飛鳥・斑鳩地域に次いで密集度の高い地域である。当廃寺の創建と時を同じくするものと考えられる寺院が多く、それらの背景となる氏族間や政治的な支配体系に共通する事柄を内在することが予想される。

長寺廃寺は、長氏（訳氏とも記される）の氏寺として考えられているが、この長氏については、渡来系氏族や渡来人の通訳としての立場であった氏族として知られ、その関連から当地域周辺の寺院でも渡来系の可能性のある寺院との共通要素を保持していたことも考えられよう。

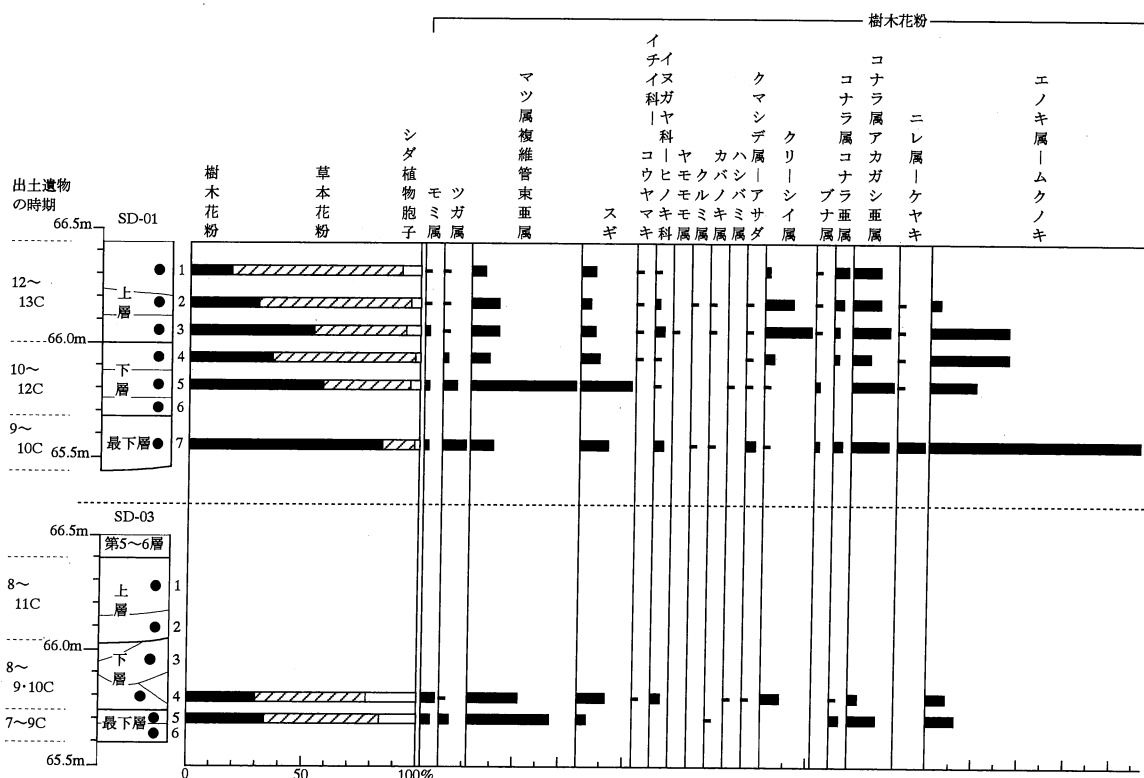
最後に、長寺廃寺の寺域の規模については今回の調査で北限中央寄りの部分を確認したに過ぎず、従来言われてきたように調査地の南方にある高良神社を中心と考えて地形的な条件を考慮に入れても南北約200m以内に納まるものと考えておきたい。なお、東西の規模については、今後の調査の進行を待たねばならず、現状では不明瞭とならざるを得ない状況である。(青木)

長寺遺跡第14次調査における花粉分析

天理大学附属天理参考館 金原正明・古環境研究所 金原正子・中村亮仁

長寺遺跡第14次調査において、長寺廃寺の北辺境界溝であるSD-01（北溝）、SD-03（南溝）の堆積物の花粉分析を行った。試料採取層準と各層に含まれる遺物の時期は分析結果の図に示した。花粉分析は、水酸化カリウム処理、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理を施して行った。計数の結果は花粉数200個をこえる試料について、花粉総数を基数とする百分率を求め、組成図に示した。

SD-01では、最下位でエノキ属—ムクノキを主とする樹木花粉の占める割合が高いが、上位に向かって樹木花粉より草本花粉の占める割合が増加する。エノキ属—ムクノキは、近接して生育していたとみなされ、当初の長寺廃寺に生育するか植えられていたと推定され、樹木が茂っていた。下層で部分的に多くなるマツ属複雑束亜属（アカマツかクロマツ）やスギも同様であったと推定される。下層の時期（10～12世紀）ではイネ科やヨモギ



属の花粉が増加しソバ属も出現することから、周囲でソバ属などの畑が広く営まれたとみなされる。上層の上部の時期（13世紀）になると、イネ属型花粉が増加し、遺跡周辺水田が増加したとみなされる。

S D-03は花粉の含まれていない層準がほとんどで、検出された試料ではアカザ科—ヒユ科やヨモギ属の花粉が多く、乾燥していたと推定される。花粉組成はS D-01の下層の組成に類似する。ややマツ属複雑管束亜属（アカマツかクロマツ）の花粉の出現率が高いため寺域内にアカマツかクロマツが生育あるいは植えられていたと考えられる。ソバ属の栽培も行われているが、遺物からは正確な時期が把握しにくい。

以上まとめると、9世紀前後の長寺廃寺にはエノキあるいはムクノキやアカマツやクロマツの樹木が生育あるいは植えられていた。10世紀から12世紀にかけては、ソバ属に代表される畑作が周辺で盛行する。13世紀になると水田が拡大する。これらの畑作と水田の変遷は、長寺遺跡特有の変化ではなく、平安から中世にかけての大きな農耕の変化としてとらえられる。

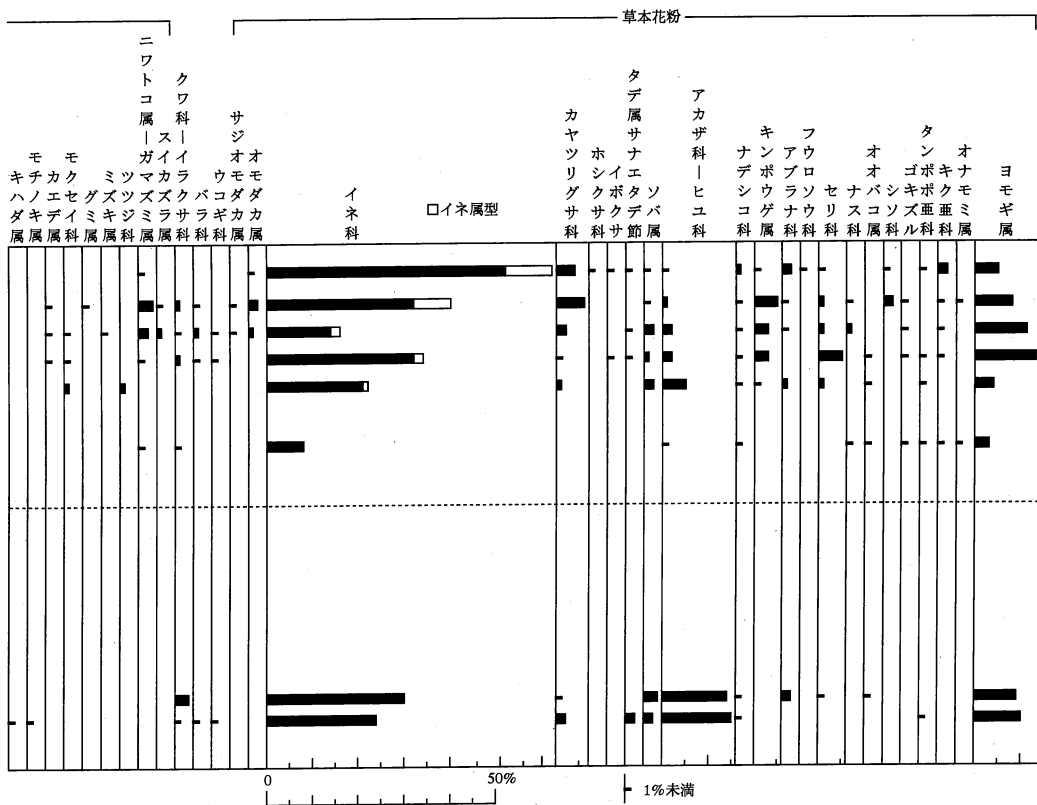
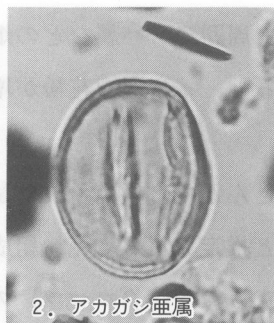


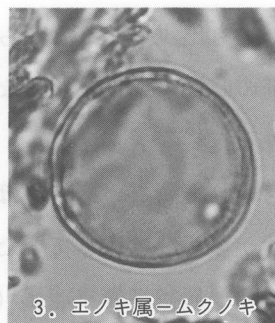
図 長寺遺跡第14次調査における花粉分析結果（花粉総数が基数）



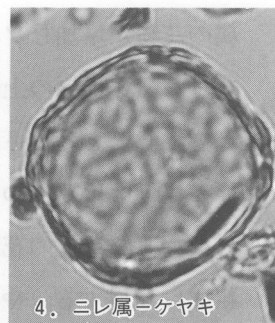
1. スギ



2. アカガシ亜属



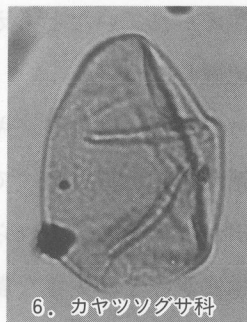
3. エノキ属-ムクノキ



4. ミレ属-ケヤキ



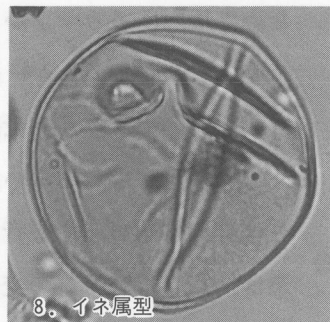
5. オモダカ属



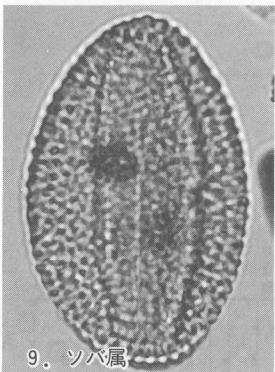
6. カヤツツグサ科



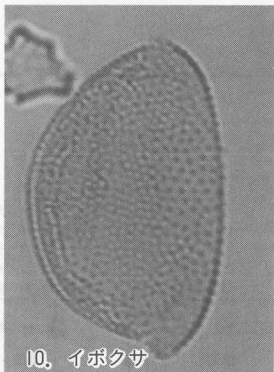
7. アカザ科-ヒユ科



8. イネ属型



9. ソバ属



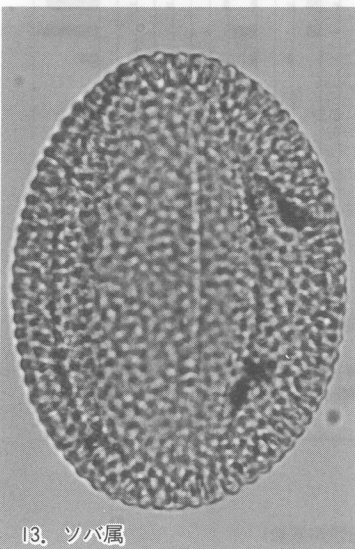
10. イボクサ



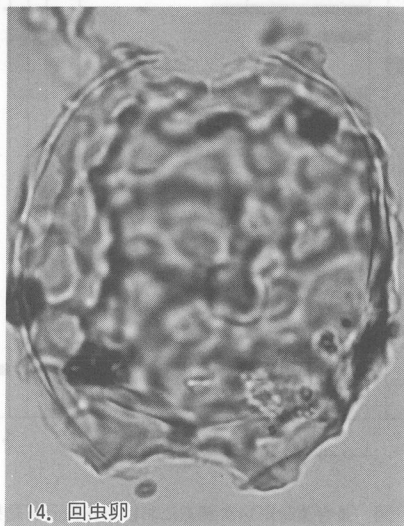
11. ヨモギ属



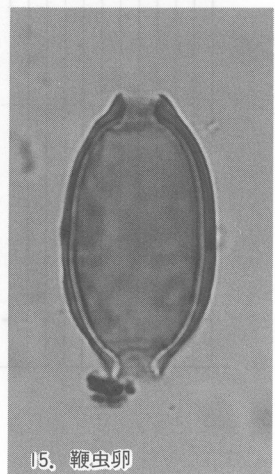
12. イネ科



13. ソバ属



14. 回虫卵



15. 鞭虫卵

柳本遺跡群竹ノ尻地点の調査

I はじめに

柳本遺跡群竹ノ尻地点は平成2年度に実施した建て売り住宅建設に伴う試掘調査で確認した縄文後・晩期および弥生末～古墳初頭の集落遺跡である。

今年度は、第1次調査地の南西に所在する畑地において個人住宅建設の事前調査として第2次調査を実施した。調査は平成6年6月6日より開始し、6月23日に終了した。総調査面積は130㎡であった。

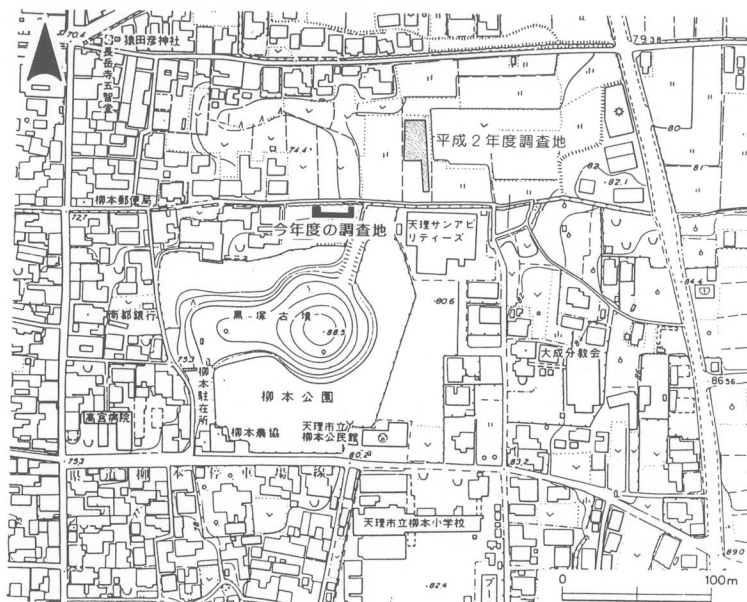


図19 調査地位置図 (S=1/5000)

II 調査の結果

層序：現地地表下0.2～0.3mまでの耕作土以下では、調査区の西端で約0.2m、東端で約0.45mの灰黄褐～暗褐色の砂礫混じり土を基調とする堆積土が地山直上に見られる。これらの堆積土中に土師器・須恵器等の細片が含まれ、若干量の中・近世土器片が混在する。地山のレベルは西から東に向かって下降し、調査区の中央では、微量の縄文土器片を含む黒褐色粘質土の堆積がみられ、谷状の地形を成している。

検出遺構：上部堆積層の上面では、地山直上に至るまで耕作に伴う素掘り小溝が検出されたに過ぎず、顕著な遺構や遺物の出土は確認されなかった。

暗灰黄色砂礫土を基調とする地山の上面においては、調査区の中央から東にかけて自然流路2条を検出している。これらの自然流路はいずれも北東から南西の方向へ流れるもので、暗褐～黒褐色の砂礫混じり粘土が堆積し、深さは約0.5mである。埋土の上部から少量の縄文土器片が出土しているが、下部では植物遺体の堆積のみ認められ、土器等の出土は見られなかった。

これらの流路は、その方向性から第1次調査区南部の流路の下流域と考えられる。また近在する黒塚古墳の北側に東西方向の浅い谷地形が存在することがこれまでの調査により明らかにされている。(青木)



調査前全景
(南西から)



第Ⅲ層上面小溝群
(南から)



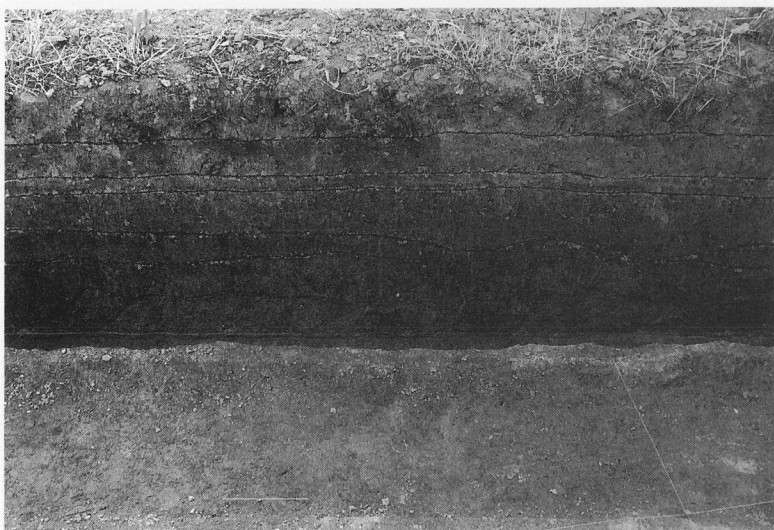
第Ⅳ層上面小溝群
(南から)



第Ⅶ層上面
遺構検出状況
(北から)



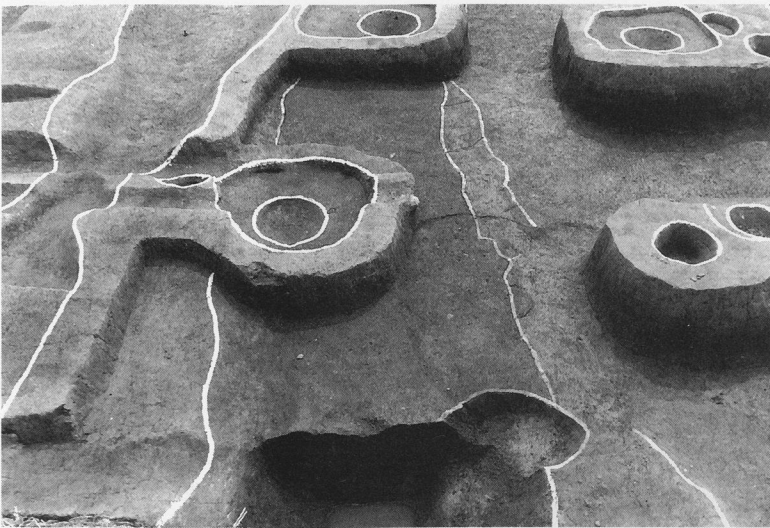
第Ⅵ層上面
遺構検出状況
(南から)



調査区東壁
土層断面



SD-01, SD-02
完掘状況
(西から)



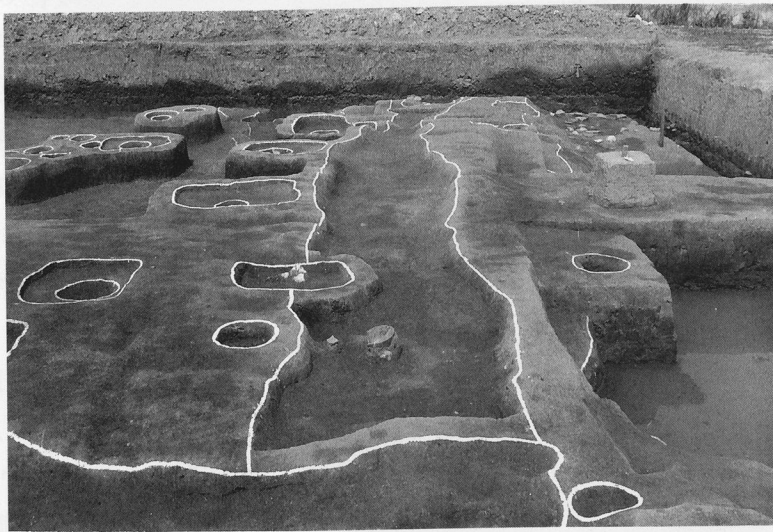
SD-02
検出状況
(西から)



SD-01, SD-02
完掘状況
(東から)



SD-02
中央アゼ土層断面
(東から)



SD-03
完掘状況
(東から)



SX-02
完掘状況
(西から)

平成7年3月

天理市埋蔵文化財調査概報

長寺遺跡 (第13次)

長赤遺跡 (第14次)

柳本遺跡竹ノ尻地点 (第2次)

発行	天理市教育委員会
編集	天理市川原城町605番地
印刷	天理時報社
	天理市稲葉町80番地